

---

## 街道 ~ Pass go foward.

S.N.S

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

街道 Pas s go f o w a r d .

### 【Nコード】

N39430

### 【作者名】

S・N・S

### 【あらすじ】

十三鬼将・十二覇聖の試練を突破し、再び『迅帝』岩崎基矢とのバトルを挑んだS15シルビア、『シルバーナイトシャイン』川内祐馬。

C1、新環状等と、走り屋が主に攻める全てのエリアを走りきり、ギブアップへと追い詰め、リベンジを果たし、その名を首都高の歴史に刻んだ。

しかし2ヵ月後・・・岩崎の家に届いた宛名不明のその手紙は、祐馬を街道の世界へと呼び込むものだった。

この手紙の主は『フォーエバーナイツ』、またの名を『エモーショナルキング』というランエボ3・・・街道界の伝説といわれる人物である。

奴は祐馬に街道を攻めてもらい、最終的に自分を出すという、遠回しな挑戦状といった感じだった。岩崎は手紙を祐馬に見せる。

挑戦に乗った祐馬は街道へと乗り込み、幾多の峠を攻め、エモーショナルキングとのバトルを目指す・・・。

シリーズ1作目「首都高×Limit Battles・・・」  
を読んでから読むのを推奨します。

## Prologue (前書き)

よく言われますが、実際の公道での暴走行為はやめましょう。

## Prologue

川「・・・何い・・・」

後退していく迅帝・・・

そう、あの日のシルバーナイトシャインVS迅帝の二度目の対戦は、俺の勝利で終わったんだ。

あの瞬間にリベンジを果たした俺は・・・首都高の伝説の一人となつたんだ。

・・・だけど、それだけで終わりはしねえ。

もつと伝説を作り上げてみせる・・・いつまでも走り続けるんだ・・・！

数年前、栃木県日光市 第一いろは坂にて・・・

「・・・つづくしょう・・・！ここで無様を晒すわけにはいかん・・・！」

「（だんだんあつちはペースが落ちてる・・・さつき無理矢理抜き返したせいでここでへなつてるんじゃないかい・・・？）」

「この野郎・・・でも、もうすぐゴールだ、最後のヘアピン連続地帯を抜ければ・・・何いっ!？」

「（これで終わりにするぜ・・・!）」  
「つ!!!!!!!!・・・そんな・・・!）」

「（伝説の座はもらった・・・!）」  
「最後の最後までまた前を譲ることになるだなんて・・・この俺が、パンテラがあっ・・・!!!」

「（・・・俺が・・・『エモーショナルキング』だ・・・!!!）」  
「・・・こうして、一台のパンテラと一台のランエボ?のバトルが決した。

そしてその瞬間、パンテラに勝ったエボ3は、伝説と呼ばれるようになり、その姿をくりました・・・。

紫「（パンテラ、遂にその座を明け渡したのね・・・これはいろは坂・・・いや、街道中の一大事かしら。）」

岩「（遂に潰えるか・・・いつかは負けるとは思っていたが・・・あんな出たての奴に負けるだなんて・・・）」

そして今・・・街道界に新たな歴史が刻まれようとしている・・・。

首都高の頂点に立った、スパークリングシルバーのS15シルビアの手によって・・・。

街道↳Pass go forward・・・

## Prologue (後書き)

次回から本編開始です。

## 街道へと誘われて

川「(よし、今日も全戦全勝、好調だな。)」  
今日も『シルバーナイトシャイン』は負け知らず、無敵の強さで勝ち星を増やしていた。

川「(前みたいにな、迅帝ほどの接戦が繰り広げられないのは少し寂しい気もするけど、勝ちをどんどん積み重ねられるのは素直に嬉しいよな。さて、次の相手は・・・)」  
その後も2勝していった祐馬であった。

幸「お帰り。」

川「ただいま。もう帰ってきてたのか。」

幸「ああ。今日はあんま相手に恵まれなかったもんでな、早々と戻ってきた。」

川「そうか。」

幸「今日も10勝くらいしてきたのか？」

川「そうだな、大体そのくらいだ。」

幸「流石は首都高の伝説、だな。」

川「サンキュー。まあ、親父には敵わねえけどよ。」

幸「そうか？んなことねえさ、俺だって昔は1日でもそのくらいだった。」

川「へえ。」

幸「・・・っていうか、迅帝の次は俺を目指す気は無いのかよ？」

川「親父を？・・・つまり・・・首都高の真の伝説に、か。」

幸「ああ。まさかあれで終わりとか考えてたんじゃねえだろうな。」

川「大丈夫さ、ちゃんと迅帝より上がいるってのは分かってる・・・けど、まだまだな気がするんだ。」

幸「あ？」

川「まだ親父とバトルするまでの力が俺には無いって事さ。あのス



「プラを操る親父を思い出せば、まだ俺には敵わない。それだったら、もつと攻め込んで、完全無欠の走りを見せていくしかねえ。それを親父とやるには、まだ俺には早い気がするんだ。」

幸「ふ〜ん・・・そうか・・・まっ、お前の好きにすればいいさ。」

川「ああ。」

幸「でも、記録はまだ更新し続けるからな。」

川「分かってらあ、親父の無敗記録に関してはよ。」

幸「なら良かった。」

その頃・・・

岩崎基矢（迅帝）邸にて

岩「（もうあいつに最速の座を奪われてから2ヶ月か・・・。・・・そろそろリベンジつてのもいいか・・・ん？）」

首都高から戻ってきて手紙を確認すると、一通届いていた。封筒である。だが・・・送り主が書かれていない。

岩「（こんな妙な届いたのは初めてだな・・・何々・・・）」  
書かれていたのは・・・

“久しぶりだな、迅帝。どうだ？あのS15とやらに負けてしまったんだろ？二度崩された不敗神話も、今度こそ長続きしてしまいうだな。”

ところでだ、この封筒に入ってるもう一枚の手紙を、そのS15・・・  
・「シルバーナイトシャイン」だっけな？そいつに見せてくれ。

お前がやればいいだろうって話になるだろうけど、丁度あんたの住所知ってるし、S15の奴のは知らないから、もしも会う機会があったら見せてくれ。

あんま命令できる口じゃないが・・・俺もそろそろ、実力を見たくなってきたな。”

岩「（・・・なるほどな・・・いいぜ、会う機会を設けてやろうじゃないか・・・）」

次の日

石「お前が迅帝を倒してからもう2ヶ月か。」

川「ああ、もうそんななるのか……。」

厚「あつという間だな、祐馬があのだ迅帝を倒してから2ヶ月だなんてよ。」

川「だな。勝ち続けてればこんなもんなのかね……。」

石「どうなんだろうな……。そういえば、あの後迅帝にはバトル挑まれたりしないのか？」

川「いや、全然リベンジする気配なしです。」

石「へえ……。」

厚「結構リベンジしてくるやつだと思うが、それほどでもないって事か。祐馬はもう一度戦う気あるのか？」

川「ちよつとだけ。あつちが来ればその気になるだけだな。」

厚「そうか……。」

そうして今宵も、祐馬はシルビアで首都高に繰り出していた。

川「(うっしやあ、これで5勝目)。今日も絶好調だな。」

湾岸線を上って新環状に入り、再び湾岸線に入ろうとしていた。

川「(それじゃ次の相手を……ちよつと待て……)」

後ろから猛スピードでシルビアに近づいてくる一台のマシン……

あのマシンは……

川「(迅帝……！今日石田さんと大輔と話したって時に来るのか……！……いや……あれ?)」

シルビアの後ろで減速、このままバトルを申し込むのかと思ったら、シルビアと並走し始めた。

そして、中の人……岩崎基矢は、手で「ついてこい」と合図を出した。

川「(バトルじゃないのか……?ああいうサイン出してるって事はそうだよな……とりあえず、ついていこう。)」

迅帝のR34についていく。

やがて首都高を降りて、一般道を走った。

そして着いた先は……

川「……岩崎……なっ、迅帝宅ですかい……？」

岩崎の表札を見れば明らかだ。ここは岩崎基矢の家である。

川「(ガレージも綺麗だな……おっ……)」

一台のマシンが目に残る。

川「(あのインプ……峠用のやつだったっけか……)」

青いGDBインプレッサが停まっていた。バイナルで派手になっている。

川「(にしても、一体俺をここまで連れ出して、何の用だっただ  
?)」

マシンを止め、降りる。

川「まさかあんたの家に連れてこられるとは思わなかったな。」

岩「そりゃそうだろうな。まあでも、こういう伝説級同士の話は、  
PAでするもんじゃないだろ。」

川「まっ、それもそうだな。」

岩「とりあえず家に入ってくれ、本題はそっちで話す。」

川「分かった。」

家に入る。

因みに、整備場つきガレージがあるのを除いたら普通の家だ。別に  
豪邸ってわけではない。

岩「何か飲むか？」

川「ああ、コーヒーで。ブラックでもOKだぜ。」

岩「あいよ。」

川「……っていうか、俺があんたみたいな大物にそんなことやら  
せていいのかよ……？」

岩「んなこと言っつな、今となっては俺よりお前の方が大物だろ。」

川「そんなこと言っつあって、実績で言えばあんたのほうが上だし……  
」

岩「そうかもな。」

コーヒーを渡す。

妙に馴れ馴れしいのは、同じ伝説の走り屋としての仲間意識だろう。  
岩「で、本題はこれだ。」

川「?・・・手紙?」

岩「・・・昨日俺の家に届けられてたんだ。差出人は不明だが、内容を読めばすぐに分かった。お前に、これを読んで欲しいんだと。」  
川「どれどれ・・・」

手紙にはこう書かれていた。

“首都高最速のS15シルビア・・・まさかシルビアが首都高最速だなんてな。まあそれは別にして・・・

岩崎基矢、つまり「迅帝」を通じてこの手紙を見てくれていることと思う。

早速だが、あなたは「街道」、つまり峠の世界に興味は無いか?

首都高とは違った、低速コーナー、ヘアピンが迫るテクニカルなコース・・・

・・・その街道に来てみないかい?

まあ実際、本音を言ってしまうえば君と是非バトルをしたいんだが、君みたいな存在がただ街道にちょこつと来て俺とバトルするだけではつまらない。

何しろ、いつだかの十三鬼将の一件以来、街道界に面白いことが起きていないからな。

で・・・色々な峠を攻めてほしいんだ。そいで幾多の走り屋を破ってみてくれ。

街道を湧かせてくれよ。色んな峠でな。まずは数をこなしてくれ。その時が来たら・・・俺の出番という事になるだろう。

まあ色んな奴と戦うつても、他にも実は戦ってもらいたい奴がいるんでな。

ただ、最近連絡がつかないんで・・・。

そういうわけだ。受け入れてくれるなら、どこかの峠を攻めてくれ。それを合図とする。”

川「・・・要するに、俺に街道で勝ちまくれってところか・・・。」  
岩「だろうな。しばらくして、お前に挑んでくるって感じだろ。」  
川「ほ〜う・・・で、こいつは誰なんだ？」

岩「こいつは・・・街道界最速といわれる男、『フォーエバーナイツ』だ。」

川「『フォーエバーナイツ』？」

岩「またの名を『エモーショナルキング』。」

川「『エモーショナルキング』・・・っ！話を聞いたことがある、エモーショナルキングが街道一の走り屋って・・・」

岩「そのエモーショナルキングだ。通り名は『フォーエバーナイツ』なんだけどな。」

フォーエバーナイツ、またの名を「エモーショナルキング」。かつて街道最速と呼ばれていた「街道プレシデント」をいろは坂で見事に破り、街道最速の座を手に入れた、ADVANを意識したと思われる赤と黒の工ボ<sup>3</sup>。

その後は拠点を、熊本県の阿蘇へと移し、数々の走り屋を倒した。それからしばらくして十三鬼将が街道に攻め入った時は、迅帝を北海道へ誘い込んだ街道プレシデントと同様に、北海道へ足を運んでいる。北海道のどこへ行ったのかは不明だが。

その後、十三鬼将が首都高へと戻ってからは、街道プレシデントと同様に北海道に留まることはなく、行方をくらました。

現在は阿蘇でも目撃されておらず、どこにいるかは不明である。

川「あいつが俺に興味持ったって事か。そいで街道に誘っている、と。」

岩「実際はバトルしたいってとこなんだろうけどな。とりあえず街道での实力を見てみたいって事なんだろ。」

川「そうか・・・よし、とりあえず誘いには乗るぜ。」

岩「お前ならそうだろうと思ったぜ。」

川「ここで退いてたら、つい最近までお前さんがいた地位の人間じゃねえからな。」

岩「はっは、なるほど。」

川「教えてくれてサンキュー、早速明日からどっか行ってみる事にする。」

この瞬間、フォーエバーナイトの挑戦を受け入れた。

・・・シルバーナイトシャインの街道界進出である。

川「・・・って、その前に色々調べなきゃいけないか・・・。関東のつて以外、どこの峠攻めろって指定されてるわけじゃねえし・・・」

岩「そうだな・・・そこら辺なら結構あつたりするけどな。色々攻めてみるといい。俺はそこまで詳しく知らないからな・・・すまん。」

川「大丈夫、そういう情報に詳しい人が知り合いにいますから。」

岩「そうか。なら良かった。・・・そうだ、一つだけ教えられることがある。」

川「なんだ？」

岩「各峠の『スラッシャー』を倒しさえすれば、ある程度名が上がらるはずだ。」

川「スラッシャー？」

岩「ああ。」

スラッシャー（SLASHER）とは、各峠のリーダー的（というよりはボスの）存在を担っている走り屋で、当然その峠では実力者である。

その峠のスラッシャーは他の峠でも知られていることが多く、かつ速いため、倒せば一気にその倒した走り屋の情報が知れ渡る、というものだ。

ただしスラッシャーは、走り屋がいる全ての峠にいるわけではない。あまり走り屋の活動が盛んではない峠にはいないのである。

また、スラッシャーよりも速い者が存在する峠も少なくは無い。そいつも倒せば、更にその名は知れ渡る。

川「なるほど・・・。」

岩「まだ俺にはその程度しか分からないけどな……。」

川「でも普通に参考になったぜ。ありがとさん。」

岩「どういたしましてよ。」

川「それじゃ、そろそろ行かせてもらうぜ。」

岩「分かった。頑張ってくれよ。街道での活躍、期待してるぜ。」

川「サンキュー。」

祐馬はシルビアに乗り込み、帰宅した。

岩「（あのシルビアが街道にねえ……フォーエバーナイツ……早く戦ってやれよ。様子見も程々にしねえと……俺もまた準備をしないとな。）」

川「（峠か……何となくwkwkしてきたぜ……！それじゃ、早速情報提供を……）」

電話相手は、射命丸。

川「（……そういえば俺から電話かけるのって初めてだな……）」

射「あゝ、もしもし？こちら射命丸。」

川「ども、川内祐馬です。」

射「おっと、これはこれは首都高最速の男ではありませんか。そちらからかけてくるなんて珍しいですねえ。」

川「いやまあ、ちょっとこれから聞きたいことがあります。それなりに重要な、ね。」

射「ほう……。」

今回の件について話す。

射「なつ、なんと……あのフォーエバーナイツが貴方を街道に誘い込みましたか……。」

川「ええ。それで、その攻める峠について、色々射命丸さんに教えてもらおうと。」

射「それはそれはお安い御用で。自分で言うのもあれですが、多くの峠の走り屋情報を把握してますからねえ。」

川「助かりますな。有り難うございます。」

射「いえいえ。にしても、そうしたら首都高はどうするんですか？  
しばらく首都高最速不在ですか？」

川「いやいや、もちろん首都高は走りますよ。街道を攻めつつ。」

射「それは安心。」

川「それで……とりあえず手始めにどこら辺がいいですかね？」

射「うん……そういえば箱根攻めましたよね。」

川「ああ、はい。」

射「まだあそこのスラッシャー倒してないみたいですし、まずはこんな感じってとこで倒してみたらどうですか？幽々子は倒してるんですし、受けてくれないわけ無いと思いますよ。」

川「箱根のスラッシャーか……どんな奴ですか？」

射「『MMC大字』（・おおあざ）っていう、FTOに乗ってる奴ですな。最近では週に2度くらいしか来てませんが、青い炎のバインル貼ってるんで、来る日にいけばすぐに見つかりますよ。」

川「FTOか……。なるほど。それじゃ、そいつを倒してみますかね。」

射「実際幽々子ほどの速さじゃないみたいですが、テクはありますからねえ。頑張つて下さいよ。」

川「どうも。それじゃ。」  
ピッ

というわけで、まずはMMC大字を倒すこととなった。

川「（明日箱根に行つて見るか……。週に2度来るその日だったらいいな。）」

幸「フォーエバーナイツ……。俺は知らねえな、峠のほうの事情は全くなんでよ。」

川「そうか。とにかく、そいつに挑戦状的なのを俺が受けたから、明日はまず箱根のスラッシャーを倒すことにしたんだ。」

幸「ほーう……。まずは実力を示すわけだな……。っつーか、首



都高も攻めるとはいえども、メインは峠なんだし、ある程度いじりつもりだろうな？」

川「もちろん、明日ある程度足回りをいじって箱根に乗り込むつもりだぜ。」

幸「そうか・・・ならいいさ。絶対に負けるんじゃないぞ。」

川「あいよ。フォーエバーナイツと戦うまで、絶対に負けやしねえさ。親父も、首都高で攻めまくってくれ。」

幸「ほいほい。」

遂に、祐馬は峠を攻めることとなる。

明日は箱根のFTO・・・どんなバトルとなるかは分からないが、祐馬は内心勝てる気満々だった。

ただ油断してはいけないというのも、もちろん忘れてはいない。まずはスラッシャー最初の腕試しである。

次の日、整備場にて

石「ほーう・・・フォーエバーナイツ・・・『エモーショナルキング』と言われてたら、名前だけ聞いたことあるけどな。」

厚「街道最速の工ボ3だっけな・・・そのありえねえ速さを見たときの衝撃は迅帝並だとか聞いたこともあるが・・・」

石「やつぱし、街道の有名人も目をつけていたとはね・・・」

川「まあ、まずは峠の奴らをどんどん倒していくだけっすよ。どんな奴が相手だろうと、絶対に負けやしません。」

石「自信満々だな。」

川「この自信が長く続けばいいんですけどね。大丈夫だと思いますが・・・よし、これでOK・・・」

シルビアのセッティングが完了・・・。

内容としてはサスを始めとする部位をセッティング。エンジンも、親父ではあるがある程度いじり、峠に対応できるよう、ある程度デチューンを施した。

いじってるうちにエンジンを見てると、こんなもんは俺には絶対出

来ねえ、と思つた祐馬である。

厚「それじゃ今夜、箱根だな。」

川「ああ。MMC大字、絶対倒すぜ。」

夜・・・

川「（出陣といきますか・・・さあ、行くぜ！）それじゃ親父、行つてくるぜ。」

幸「OK。頑張れよ。」

川「ああ！」

家を出発、箱根へと向かった。

川「（着いたついた・・・FTOはいるかな・・・）」

ダウンヒルスタート地点の駐車場に着いた。早速、MMC大字を探す祐馬。

川「（・・・おつ、今日は来てるのか、幽々子・・・それに妖夢も・・・）」

FTOの前に、幽々子のチェイサーと妖夢のZが目にとまった。

あちらも気づいたようだ。

西「あら、こんばんは。またここに攻めに来るなんて、峠走りたい気分にならなかつたのかしら？」

川「いやまあ、色々深い事情だね。」

魂「何かまたあつたの？」

二人にも事情を話す。

西「フォーエバーナイト・・・あの男ね・・・。」

魂「街道最速からの誘いですか・・・。」

川「そんなこんなで、色々な峠を攻めて、フォーエバーナイトに街道での実力を示す、というわけであつて。」

西「なるほどね、それでまずはこのFTOを倒そうって事？」

川「そうなるな。」

魂「となると・・・しばらくは、十三鬼将が侵攻してきた時のよう

に、街道中で騒ぎになるかもしれませんね。」

西「まあ、侵攻ってわけじゃないから、悪者視されることはないですよ。」

川「だといいいけどな。で、今MMC大字ってどこにいるか知ってるか？見た感じ、バイナル貼ったFTOっつーのは見当たらないけど……」

魂「さっき聞いた話だと、一応今日は来るけどまだ来てないみたいね。もう少し待ってみたら？」

川「そうか、サンキュー。そういえばプリズムリバー三姉妹はどうしたんだ？」

魂「今日は遠征ですって。明日はメルランとルナサがソロでどっか行くみたい。」

川「へえ……」

西「（あのエボ3も動き出したのね……。紫にも話しておいたほうがいいかしら……）」

というわけで、まったりとFTOを待つこと20分。

川「（……来たな。）」

西「お目当ての人物みたいよ。」

あのバイナルは間違いない、MMC大字だ。

魂「とりあえずまずは話してみるといいわね。」

西「受けてくれないなんてことはないはずよ、有名人だし。」

川「よし、それじゃ行ってみる。」

大字の所へ行く。丁度あちらもマシンから降りたところだ。

川「よう、あんたが『MMC大字』、この峠のスラッシャーでいいか？」

大「ん……まあその通りだけど、見ない顔だな……。どっかの峠からの挑戦者か？」

川「いやまあ、言っちゃあなんだがあのマシン見れば大体分かると思う。」

大「あれか・・・なつ、お前・・・首都高最速の・・・！」

それを大字が言った瞬間、駐車場がざわついた。

「げえつ、今首都高最速って言ったけど、マジでいるじゃん！」

「本当だ、あのシルビアは文々。で見たとおり・・・っていうか、大字さんに話しかけてるってことは、大字さんに挑むのか!？」

「マジかよ!? 大字さん、対抗できるのか・・・!?」

峠でも、新しい首都高最速の名は知れ渡っている。

大「なるほど・・・まあ理由はどうであれ、バトルなら喜んで受けるぜ。幽々子を倒したとか、首都高最速とかの腕前を見てみたいかな。」

川「そうか、ありがとさん。それじゃ早速、バトルいいか？」

大「もちろんだ。グリッドに並べろ。おおつと言っておくが、FTOだからって舐めるなよ、もうこのFTOのチューンは最終段階突入、このFTOに敵うチューニングはねえぜ。もちろん、俺のテクも侮ってもらっちゃあ困るからな。」

川「大丈夫だ、このバトルで相手を侮るなんてことはしねえ。」

大「よし、いい意気込みだ。それじゃ行くぜ。」

二台がグリッドに並ぶ。

川「(さあ、それじゃ行きますかね・・・気い引き締めていけよ・・・)」

スターター「カウント行くぞお!! 5、4、3、2、1、GO!」

レースがスタート・・・初めてのスラッシャー戦が始まった。

シルビアは前に出ない。わざとアクセルを緩め、FTOの後ろにくく。

川「(侮ることはねえと言ったが、せつかくのスラッシャー初戦で前出て後はぶつちぎりなんてことがありえるかもしれねえ。それだつたら尚更つまらないからな。MMC大字、この峠でスラッシャーで居続けられる実力を見せてくれよ!)」

あくまで手を抜いたのはスタート直後2秒のみ、その後は絶対に手

を抜かず、FTOに迫る。当然最後には、FTOの前でフィニッシュするつもりだ。

大「（ありゃあわざと後ろにつきやがったな・・・何企んでるかは大体分かるけどな。後でその選択を後悔するかもしれないぜ・・・！）」

FTOは言うだけの・・・いや、ひよつとしたらそれ以上の加速を見せていた。見る限りでは、100km/h加速は4秒弱・・・あそこまで加速するFTOは、首都高でもいるかいなかである。

川「（思うほど緩める必要が無いとはな。確かにありゃあ、舐めてかかったら痛い目にあうな・・・だが、加速はまだまだこつちが上だぜ！）」

最初の右コーナーを抜け、左コーナーへ。

川「（スピードが速い割に全く拳動を乱す事無く、グリップでベストライン上を走る・・・いいハンドリングだな。）」

大「（長年スラッシャーをやりながら鍛えた俺の腕とマシン、いいコーナリングだろ・・・！）」

右ヘアピンを抜ける。FTOの上手いブロックにより、シルビアは前に出られない。

川「（これでも苦戦は無いけそうな気もするんだよな・・・にしても、ほんとギャラリー多いんだな・・・こんなに視線が集まる中でバトルなんて初めてだぜ。）」

道端のいたるところにギャラリーがいる。走り屋のドラテク、そして走り去るマシンに魅せられた者達ばかりだ。

そんなギャラリーたちに見られながらこういうバトルをするのは祐馬にとって初めてである。前に箱根に来たときは、幽々子達とのバトルの際はいつもの常連さえ集まらない日であった為当然いなかった。親父が紫とバトルをしているときに来たときは、バトルをするときにはもう殆どギャラリーはいなかったのである。

川「（バトルのほかでもこういうのを感じるようになるとはな。まあ峠は、走り屋の攻めを目の前でみれるっつーのが利点だよな。首

都高は高速道路、道端にいれるわけないし。」

そんな事を思いつつ、左ヘアピンをドリフトで抜ける。

「うおっ、すっげードリフト!!」

「本当にあれが首都高最速なのか。大字さんとドリフトしてると一層様になるな〜!」

続くヘアピンへ。しかし、既に大字は焦りを見せていた。

大「(まだ序盤だが・・・もうここに来てこれだけの汗をかくとはな・・・バックミラー越しに伝わるプレッシャーは、首都高最速ともなるとこんなにきついものなのか・・・!!)」

祐馬もプレッシャーを与えようと張り付いているが、祐馬自身、そしてシルビアから出てくるオーラが、前を走る大字を更に追い詰めていた。

川「(ここまでできっちり守ってこれるとは流石だな、このシルビアの本領をまだ発揮させてくれねえとはよ。そろそろ中盤、ここいらから一気に抜き去りたいところだな・・・!)」

アクセル全開はまだ無いシルビア。FTOは好調であるが、大字自身はプレッシャーに限界を感じてきている。

200km/h程でヘアピン後の区間を疾走する。

川「(さあ・・・おっとお、ここでいけるっ!!)」

大「(ちくしょうっ・・・!!)」

2連ヘアピン前の右コーナー、ここでFTOがアクセルワークでミスを犯し、スピン状態になった。

その隙にシルビアは抜き去る。

「ああっ、大字さんがスピンした!!」

「大字さんがバトルでスピンだなんて・・・」

川「(スピンしたところを抜き去るとはな、本当は普通にズバーンと横から追い抜きたかったけど。そいじゃ、ゴールまで一直線と行きますか!!)」

抜いた瞬間にアクセル全開。

大「(抜かれちまったが、まだ勝ったと思うなよ・・・!)」

スピンから即座に復帰して、同じくアクセル全開で行くFTO。  
川「(復帰が早い、最低限に差を広げないように来たか・・・！これだから舐められねえな・・・)」  
2連続のヘアピンが迫る。シルビアは進入速度150km/hでドリフト。

FTOは同じく150km/hで若干滑り気味のグリップ。

川「(あそこをそのスピードで抜けるか・・・)」

大「(追いつけねえ・・・だがまだ終わったわけじゃない・・・！このFTO最終形態の更なる実力をこのシルバーナイトシャイン相手に発揮せねば・・・！)」

大字は後ろに出て少しだけ気持ちは楽になったようだ。あの厳しいすぎるプレッシャーを感じる事が無いからである。

だが、傍から見れば、単純に「抜かれた」という点で厳しい状況だ。

川「(もうすぐ最終セクション、あそこを抜ければ後は高速で駆け抜けるのみ・・・！絶対にミス無く、最高のラインで行ってやる！)」

大「(もつと出せえつ、俺のFTO・・・！)」

テクニカルセクションの右コーナーへ進入する。

川「(よし、ここは決まった。次はどうだ・・・)」

大「(綺麗なドリフトなこと・・・！くそつ、離されてる・・・！)」  
続いて左、左・・・

川「(ここまで完璧だぜ。さあ、ここで最後だ・・・！)」

大「(ここでなんとかいけるか・・・いや、無理かつ・・・)」  
右ヘアピンを抜け再びアクセル全開・・・。

200km/hを超し、まだまだ加速する。

川「(さあ・・・最後はきっちり決めますかね。)」

ゴール手前の右コーナー、ブレーキングドリフトでそのままフィニッシュ。

初のスラッシャー戦、見事勝利を収めた。

川「(よし・・・勝ったな。)」

大「(ふう・・・やっぱ尋常じゃねえな、最速つてもんは・・・)」

「一度駐車場に入る。」

「うああ、大字さん負けちまった・・・」

「あのシルビア、すげえ・・・あそこまで大字さんを離すなんて・・・」

「となると次は幽々子さんが出てくるんじゃないか？」

「だろうな・・・」

・・・因みに、祐馬が幽々子を倒したのを知ってるのは、妖夢等の関係者と大字だけである。他の走り屋やギャラリーに知る者はいない。文々。新聞にも記載されなかったためである。

川「中々いいバトルだったぜ。楽しかった。」

大「本当か？相当離したくせに。」

川「本当さ。バトルしてくれてサンキュー。」

大「ああ。」

川「（そうだ、一応攻める峠とか聞いてみようかな・・・）そうだそうだ、実は俺、別の峠にも行ってみようと思うんだが、どっかい峠あるか？」

大「別の峠だって？・・・あんた、十三鬼将みたいに色々な峠攻めて街道制覇するつもりなのか？」

川「いやまあ、殆どそうですけど。フォーエバーナイツから挑戦状受けましたからねえ。」

大「フォーエバーナイツ！？・・・あのエボ3にだとお・・・」

川「まずは関東の峠で名を上げるって話らしいな。」

大「そうか・・・なるほどな・・・。それじゃあ・・・うん・・・そうだな・・・」

川「どんなコースだっていいぜ。道が狭くても、どんなにきついコーナーが多くても関係ないから、どこかい峠あるか？」

大「そうか。首都高最速はどんな峠にだってすぐ対応できるぜって事か。なるほどねえ・・・いい自信だな。」



川「じゃないと、最速なんてやっていけないさ。」

大「ははっ、そうかもな。．．．それじゃ、この近くの椿ラインはどうだ？」

川「椿ライン？」

大「ああ。」

椿ライン．．．確かにここからだとそんなに遠くない場所にある。箱根新道から直接入れるようにもなっている。

峠らしい場所で、シドドの窟辺りは特にテクニカルとなっている。

大「前まではそんなに走り屋の集まりは多くなかったが、最近はスラッシャーが出てくるほど活発になった。成りたてのスラッシャーを、お前が最初に破るってのも面白いだろ。」

川「へえ．．．よし、ちょっと調べてみます。」

大「あいよ。参考になればうれしいぜ。フォーエバーナイトのために、頑張れよ。」

川「有り難うございます。そいじゃ。」

祐馬はシルビアに乗り込み、帰路についた。今日はMMC大字を倒すことのと、近くの峠の情報をさわりだけでも知るのが目的だったのでこれで帰宅となる。

大「（フォーエバーナイトからってんなら仕方ないな．．．これからあいつがどんな快進撃を見せるやら．．．）」

頂上にて．．．

魂「．．．ほうほう．．．なるほど。幽々子様、どうやら川内祐馬の勝利みたいです。」

西「やっぱりね、そうだと思ったわ。．．．これからあの人は色々な峠を攻めるのかしらね．．．」

魂「きつとそうでしょう．．．」

西「．．．やっぱり、紫との対決もありえるかしら．．．。」

川「（椿ライン．．．まずはちよいと自分で調べられる部分は調べ

ねえと・・・スラッシャーが最近任命されたばかりの奴がいる峠か・・・最初に攻めるには、確かに面白いかもな。」  
そのまま箱根新道をアタックしながら帰っていった。

幸「椿ラインか・・・名前だけ聞いたことはあるな・・・」  
親父に椿ラインを攻めると伝えた祐馬。

川「名前だけか。でも知ってるんだな。」

幸「ああ。峠の情報もたま〜に耳に入ることがあったからな。」

川「そうか。まあそんなわけで、椿ラインってどこを攻める。」

幸「分かった。これからお前は街道攻めまくりか・・・決めたからには、そのフォーエバーナイトとやたらに挑戦するまで、諦めんじゃねえぞ。」

川「分かってるさ、大丈夫。」

その後、PCサイトを使ってコーススレイアウトを見る。

川「(ほ〜う・・・マップで見るとそこそこテクニカルだな・・・。富士見峠の部分は、南のシドドの窟よりは楽な感じか・・・。つて、調べるつつつても後は現地じゃねえとわからねえな・・・まあ、そういうときの射命丸さんだけど・・・起きてるかな・・・)」  
その時。

川「はあっ!・・・丁度射命丸さんか・・・)」  
ピッ

射「ど〜も。MMC大字とバトルしました〜?」

川「ああ、はい。丁度帰ってきたところですよ。」

射「で、勝負は?」

川「こちらの勝ち。」

射「見事ですね。FTOにしちゃあ速かったでしょう?」

川「ええ。で、そのMMC大字から、近くにある椿ラインってこの峠を教えてもらったんですが・・・何か情報ありますかね?」

射「あゝ、あの椿ラインですか。最近活発だそうで。スラッシャーも出てきましたし、レベルが上がってますよ。」

川「ほゝう……」

射「そうですね。スラッシャーは『カメラリアオーバースター』こと高田信介。ブルーのランエボ10に乗ってますね。最速も同じくこいつです。」

川「ふむふむ……」

射「まあでも、レベル自体はそんな高くは無いですよ。高田のライン取りは同じ椿ライン攻めてる走り屋では相当上手いですけど、ね。要するに油断しちゃ駄目ってことですよ。」

川「なるほどねえ……それ以外の走り屋で有名なのっていますか？」

射「うゝんと……ああ、『富士見フルパワー』山台一、イエロ―のインテグラに乗ってるそいつが高田に続く速さを持ってます。」

川「ほゝ……」

射「フルコースで攻める奴もいますが多少長いので、富士見台バス停から天照山バス停から少し先までの部分、シドドの窟から伊豆湯河原温泉までの部分に分けてレースを挑む奴もいます。」

川「そうなのか。スラッシャーはフルコースか？」

射「もちろん……。まあ教えられる事はこれくらいですね……」

・明日から早速行くんですか？」

川「ええ。フォーエバーナイツと早くバトルしてみたいですからね。」

射「そうですね。それじゃ、頑張ってくださいよ？」

川「サンクスです。それじゃ。」

ピッ

まず仕入れた情報は、新スラッシャー「カメラリアオーバースター」、次ぐ速さの「富士見フルパワー」……

祐馬はこの二人を、椿ラインの最終的な標的にすることとした。

その前に、まずはそこにいる走り屋達を撃破せねばいけない。

そして実力を見せ付けた上でバトルを申し込むのだ。

川「（とりあえず明日はまず軽く下見してからバトルだな……。wkwkだぜ……。）」

次の日……

川「（んお……。霊夢か……。）」  
ピッ

川「もしもし？」

博「祐馬？なんか幽々子から、祐馬がフォーエバーナイツから挑戦状受けたからこれから峠を攻めるって言ってたけど本当なの？」

川「そうだぜ。まずは実力を見せるのが先らしい。」

博「ふ〜ん……。となると、後数ヶ月もすれば、車での幻想郷最速と言われているあいつとバトルするかもね。」

川「車での幻想郷最速……。？」

博「八雲紫よ。」

川「ああ……。）」

八雲紫……。幸之助を追い続け、いろは坂決戦を挑み、敗れてしまった赤いアリスト……。幻想郷最古の妖怪……

川「やつぱ、幻想郷で最初にこっちの峠攻めてきた上にドラテクが高いつてのもあるのか。」

博「そりゃそうよ。紫は幻想郷でも相当の腕だし。」

川「だよな……。まあ、俺は見たこと無いけどさ。親父がいろは坂でバトルして接戦だったらしいからな……。俺もバトルするときは絶対に油断できねえな。」

博「そうね。その前に、式神の狐と猫を相手にするかもしれないけど。」

川「狐と猫？」

博「八雲藍と橙。MR2とMR-Sに乗ってる奴。この二人が紫の式神なのよ。紫と戦う前に、必ずこの二人を相手にすると思うわ。」

川「そうか。」

博「・・・おつと、私はこれからちよつと用事があるわ。それじゃ、頑張りなさいよ。峠に関しては何か私も教えられる情報があると思うから、聞きたいことがあったら電話して。」

川「分かった。サンキュー。」

電話を切った。

川「（幻想郷の奴らとのバトルももしかしたら何回もするかもしれないか・・・どんな奴らが出てくるのかねえ・・・）」  
やはり幻想郷の奴らは、峠を攻めている奴が多いようだ。

川「（さてと、今日はこれからシルビアをもうちよいいじらないとな・・・）」

というわけで、整備場へ。

今日は厚井も石田もおらず、一人で色々いじっていた。

そして、夜・・・

川「さあ親父、行ってくるぜ。」

幸「おう、負けるんじゃないぞ。」

川「分かってらあ。大丈夫さ。」

シルビアが動き出す・・・。

そう、祐馬は本格的に、街道へと出陣した・・・。

## 街道へと誘われて（後書き）

MMC大字は原作と比べれば、マシンも含め大分強い設定です。ゆ  
ゆさまには敵いませんが。

次回から物語の本格的な部分へ。まずは椿ラインを攻めます。

## The 1st Pass・(前書き)

峠に関してはちょっとググっただけなので、地元の人にはなんじやこれと思う部分があると思います。すみません。  
色々走り屋を倒すと言っておきながら描写しているバトルが少ないですが、ご了承ください。

## The 1st Pass .

川「(さ)て、そろそろ着くな．．．このICを降りれば．．．」  
ICを降りれば椿ライン進入である。

川「(つつてももうここからレース区間なんだっけ．．．?とりあえず国道1号のほうへ行ってみるか．．．)」

東海道方面へ進むと．．．

川「(ここが溜まり場、かな．．．)」

走り屋らしき者達が集まっている。彼らの後ろに停まっている車を見ると、確かに走り屋のようだ。

ただ、青いランエボ10というと．．．停まっていない。

黄色いインテグラなら、丁度真ん中のところに、スプーン製外装パーツで武装したそれがある。

川「(スラッシャーはいませんかい．．．とりあえず、まずはこつから．．．シドドの窟のほうに向かって、次の溜まり場がゴールだろうから、そこまで軽く走ってみますかね。)」

一度180度ターンして、スタートする。

「ん?今180度ターンしてたS15．．．見ない奴だな．．．」

「そうだな。新入りか?それとも、このレベルアップしてきた椿ラインの走り屋に挑むために乗り込んできたとか?」

「どーなんだろうな。新入りにしては随分すげえチューン施したから、後者の可能性が高いかもな。」

と、2人の走り屋が話している時．．．

「っ．．．(嫌な予感がするな．．．あのS15、何かで見たことがある．．．C・WESTのエアロにカーボンボンネット、何だっけな．．．丁度高田がいないって時にこんな予感がするとはな．．．)」



数分後・・・

川「よし、とりあえず終了」。走ってみた感じ、なかなか走り応えあるな。南エリアはテクニカルで面白かったぜ。」  
120km/hで次の溜まり場まで走り終えた祐馬。場所的に、恐らくここは南エリアスタート地点であろう。

こちらにも、エボ10の姿は見えなかった。ダウンヒルスタート側と比べると人数は少ない。

川「さて、そいじゃ誰か挑んでみますかね・・・。やってきたからには、バトルしないと。」

いるのは3台・・・赤のシビックと、白のS13の2台は大して外装はいじっていないが、黒のFCは違う。R Magic製のフロントバンパーが確認できる。

川「誰でもいいからかかってこいやって感じだが、まずは俺から話しかけないとな・・・。」

一度マシンを停める。マシンの側に持ち主の走り屋が居るのはS13とFC・・・まずはFCに目を付ける。

川「(外見どおりの速さはあってほしいけどな・・・)」

FCのドライバーもこちらを見ている。というか、シルビアが入ってきてからずっとだ。

川「よう。あんたはこの走り屋・・・でいいんだよな？」

「あつ、ああ。入ってきたときから見てたんだが、ここらじゃ見ない顔だな。随分いじってるS15みたいだけど、遠征か？」

川「そうだな。(文々。とか見れば普通に載ってるだろうからすぐ)あーっ、こいつは!」とか気づくと思うけどな・・・見てないのか?・・・いや、別に有名人ぶるつもりじゃないが・・・」

「なるほど・・・(なかなか速そうな雰囲気を持つてるな・・・尋常じゃないほど・・・でも今日は高田さんは来てないし・・・)富士見フルパワー」はいつもどおり北側にいるしな・・・(バトルをお望みなら、良かったら俺が相手になってもいいぜ。)

川「察しがいいな。丁度バトル相手を探してたんだ。それじゃ早速、

行こうぜ。」

「OK。レース区間は南エリア、シドドの窟のヘアピンまでだ。いいな？」

川「分かった。」

早速、スタートラインに並べる。

すると、二台の目の前に、スターターらしき人物がやってきた。

川「ちゃんとスターターみたいなのを務めてくれる奴がいるのな。」

「

とはいえどもスターター係が決められているってわけではなくて、そのときに、手の空いてる適当な走り屋が務める事となっている。

川「（それじゃ椿ライン初戦、行きますか。っふー、いい興奮だ。）

「

アクセルを踏み込み、唸るシルビア。

「（すげえ威圧感・・・これはやばい予感がする・・・!）」

FCのドライバーはマシンに乗り込み、そのシルビアの唸りを聞いた瞬間、恐怖を感じた。

シルビアが放つオーラは、それを感じることに出来る走り屋にとって恐ろしいものとなる。

川「（手が上がった、スタートだな・・・!）」

スターターの手が上がる。カウントは基本的に5秒である。

「カウントオ!!5、4、3、2、1、GO!!!!!!」

椿ライン第一戦、スタート。

軽く土煙を上げてスタートしたのはシルビア。好スタートを切ったFCを横目にしながら、すぐに前へ。

川「（よし、前には出れたな。あっちの加速は・・・大した程ではないか・・・）」

「（予想通り速いな・・・こっちはいいスタートだったのに・・・!）」

差はまだ大して開かない。・・・祐馬がアクセルの力を緩めているからだ。

川「（それだけ見れば手加減してらつて事になつちやうけどさ。まだ走り始めは、相手に合わせて力加減したほうが面白いバトルになるかな・・・）」

左コーナーを抜け、そのまま振つて中速右コーナーをドリフトする。

川「（これなら軽々ドリフトできる・・・あつちもいい感じだ。）」

「（案外ついていけるのか・・・となれば、チャンスを伺わないとな！）」

更に左コーナーを抜ける。

「（もうすぐ最初のヘアピンか・・・あそこで仕掛けられるか・・・？）」

川「（そろそろヘアピンが来るはずなんだけどな・・・っと、見えたぜ。）」

分岐が見える。真つ直ぐ行くかヘアピンを曲がるかだが真つ直ぐ行けば奥湯河原温泉だが、当然ヘアピン行きだ。

川「（いくぜえつ、ここでサイドブレーキっ・・・！）」

「（すげえつ、一気に滑つて綺麗に行きやがった・・・！）」

湯河原パークウェイからの一般車が迫るギリギリを、二台が抜けていく。

スムーズに体勢を立て直したシルビア、FCに差をつける。

川「（ここで離されちまうかあ？もつと限界まで来てくれよ・・・！）」

「（あんな綺麗に曲がるとはな・・・高田さんの四駆ドリフトでもあそこまで速くは曲がれねえ・・・くそつ、おかげで離されるだなんて・・・！）」

二台は次のコーナーへと入る。

川「（ここは普通にグリップでいけるな・・・っと、少しあそこはドリフトしていきますかね・・・）」

「（グリップでも随分軽快な走りだ・・・次のコーナーは・・・）」  
左コーナー、ドリフトで抜ける二台。更に右コーナーをグリップで抜ける。

川「(へアピン・・・!)」

「(ここもいい感じにドリフトしやがるっ・・・!)」  
ブレーキングから一気に滑らせるシルビア。

ここから200km/h近くまで加速する。

川「(さく、そろそろ力抜くのはやめにしますかね・・・行くぜ!)」

アクセルを踏む足に力を込める。ハンドルを握る手も同様だ。

「(なっ!?!あつ、ありえねえ、あんな加速見たことねえぞ!?)」

川「(さあ右コーナーあ!)」

減速し、荷重移動を上手く行って右コーナーをドリフトする。

既に彼は本気だ。

「(離されていく・・・さっきまであんな加速しなかったのに・・・!?手え抜いてたつて事かよ・・・!!)」

川「(やっぱバトルを本気でいかないのは俺の趣味じゃないな。でも、この峠最初のバトルだったから、ごめんよ!)」

そこから158km/h、再び右コーナーが迫る。

「(これじゃ追いつけるわけねえ・・・マジかよ・・・)」

・・・FCが右コーナーを抜けた頃には、もうシルビアは見えていなかった・・・。

川「(ここゴールだったのか。確かにちよつと開けた場所だな。)」

へアピンだと思っていたが、シドドの窟に続く道が途中にあった。

そこがゴールらしい。

祐馬はこれで、樁ライン1勝目を挙げた。

川「(さて・・・おっ、丁度来たな。)」

FCも10秒後にゴールした。あそこから本気出して10秒差となれば、祐馬相手となると大したものであろう。

「(マシン性能差とテクの差・・・両方敵うわけが無かったか・・・)」

両ドライバー共にマシンから降りる。

「速いな・・・桁違いなくらいに・・・お前、どこから来たって言うんだ？」

川「俺？・・・それは、どこのコースからやってきたかって事だよな。」

「その通りだ。お前みたいな凄腕の走り屋、一体どこの峠で磨いたもんかと思つてよ。」

川「ああ・・・（これは、首都高の奴が嫌われている以上、俺の正体を知らない奴に軽々と言っていいものかどうなのか・・・）」

「・・・つと、あれは・・・」

その時、方面から一台迫つてきた。

川「ん？・・・あいつ・・・インテグラ・・・（さっき上で見たあいつか・・・）」

「あいつは『富士見フルパワー』だぞ。この峠じゃ、『カメラリアオバースター』に次いで速い奴だ。・・・ん？こつちに入ってくる？」

インテグラはヘアピンを曲がらず、こちらの道路に入ってくる。

川「（これは・・・俺に用かな・・・）」

ドライバーが降りてくる。

「よう・・・おう、『エンカウトイーグルス』か。こいつとバトルしたのか？」

「えっ、ええ・・・」

川「よう、あんたが『富士見フルパワー』だな。」

「ありがとさん、通り名を調べておいてくれてよ。・・・ところで、お前はこいつを誰だか知らないのか？」

「えっ・・・いや・・・他の峠の奴だと思ってるんですが・・・」

「お前、『文々』見てないのか？見てれば確実に知ってるんだけどな。・・・こいつは、首都高最速のS15、『シルバーナイトシヤイン』だぞ。」

「何いっ・・・!？」

やはり、「エンカウトイーグルス」は祐馬の事を知らなかったよ

うだ。

「それじゃとりあえず・・・俺は山台了一だ。『富士見フルパワー』って呼ばれてるもんだ。」

川「俺は川内祐馬、ご存知の通り『シルバーナイトシャイン』だ。」

山「さてと・・・とりあえずお前は下戻ったらどうだ？俺ら二人で話しつけないもんでよ。」

「あつ、はあ・・・」

FCは下へと戻った。

山「よし・・・お前が何の目的でここに来たって言うんだ？」

川「この走り屋をとかく倒していつて、最終的にスラッシャー撃破、だな。」

山「なるほど・・・」

川「・・・案外、嫌わないんだな。首都高の走り屋つてのにさ。」

山「ああ、十三鬼将の一件か。あの件にここ椿ラインは関わる事が無かったからな、大してそいつらのことを気にしちやいなだけよ。」

川「ほう・・・。」

山「どれくらい走り屋を倒すのは高田さんに聞いてみるのがいいけどな・・・。スラッシャーは分かっているのか？」

川「もちろん。『カメラリアオーバースター』、エボ10の奴だろ？お前さんを知つてて、知らないわけがないだろ（まあ、射命丸さんに教えてもらったただけなだけだ・・・。）」

山「そうか。まあそいつは今日居ないんだが・・・にしても、とにかく倒してスラッシャー撃破と言ったが、スラッシャー以外にも色々倒すのか？」

川「そうだ。」

山「ほう・・・（こうなつたら・・・なるべく勝利を阻止しなくてはな・・・ちつくしょう・・・）とりあえず俺はそろそろ帰るつもりだったのでバトルは出来ないが、色々他のやつと戦ってみる。そいつらの全力に打ち勝てれば・・・カメラリアオーバースターの前

に、俺が相手をしてやる。」

川「OK、椿ラインNo.2としての役割を果たすぜってどこかい。」

山「まあな・・・そいじゃ、俺は行く。」

川「おう。」

インテグラに乗り込み、その場を後にした。

川「(色々倒すとは言えども・・・まあ、そこら中の走り屋を相手にすればいいか・・・そしたらあのインテグラとのバトルだな。それまでに、カメラアオーバースターの顔を拝見できるかどうか・・・さて、ここから富士見峠の方に行ってバトル、そいで今日は終わりにしとくか・・・)」

国道1号方面へ向かった。

富士見フルパワー・・・こいつを撃墜するまでに、椿ラインの走り屋を一網打尽にする、そんな考えが祐馬の頭にあった。

十三鬼将のように嫌われるかもしれないというのもあるが、それに関してあまり考えてはいなかった。

とにかく倒していけばいい・・・それだけだ。

・・・その後走り屋を見つけバトル開始、再び勝利を掴んだのである。

「はっ、はええ・・・どうやってあんなスピードを出して走れるってんだ!？」

川「(今回はぶつちぎりだ。手加減できなくてごめんよ。)」  
そのまま、帰路に着いた。

射「(・・・いよし、インテグラ&amp;シルビアの2ショットが取れてよかったな)。まあ本命はランエボ10とシルビア、だったけどね。果たしてシルバーナイトシャインは椿ラインでどれほどの活躍を見せるか・・・)」

幸「とりあえず2勝ね・・・なるほど。明日も当然攻めるんだろ？」  
川「もちろんだ。スラッシャーを倒すまで、椿ラインを離れるわけには行かないからな。」

幸「いい意気込みだ。どんな奴が来ても、ぜってえに負けるんじゃないぞ。」

川「分かってるさ、大丈夫。」  
その後、眠りについた。

幸「（峠で何勝できるのかね・・・首都高よりも広い世界だからな・・・にしても、まさか俺の息子が、ここまで出来るやつになるだなんてねえ・・・）」

次の日・・・

川「（石田さんか）」  
ピッ

川「もしもし？」

石「おう、祐馬だな。今日はシルビアいじらないのか？」

川「ええ。昨日走ってみて、あれで十分だと分かりましたから。」

石「そうか。ところで、椿ラインに青いランエボ10に乗った奴がいないか？名前が高田信介って言うらしいんだが。」

川「いますよ。スラッシャー務めてるやつです。」

石「何っ・・・そこまで速い奴か・・・」

石田が何か知っているような反応を示す。

川「えっ・・・石田さん、あのエボ10について何か知ってるんですか？」

石「いや、まあな。昨日メンバーと参加したラリーのアタック会に俺らがいつも参加するラリー会に参加するのは初めてのエボ10がいてな、そいつのタイムが結構速かったもんでよ。それで、そいつに色々話し聞いたら、椿ラインを攻めてるってのを知ってたな。」  
川「そうなんですか？」



石「ああ。おまけといつちやあなんだが、他のやつに聞いたら、最近プロのラリーストを目指し始めたらしいぜ。でも、俺らには負けちまったけどな。」

川「プロか・・・」

石「そうだ。俺らはただのラリーストだが、そいつは真面目にプロを目指すらしい。俺らに負けたとは言ったが、その後の走行を見たら中々の腕前だった。」

川「へえ・・・やっぱ、油断ならぬ相手か。」

石「だな。あの走りとなると、地元の椿ラインじゃ相当走りこんでるだろうから、かなり上手いと思うぞ。マシン性能だって、あれだと600馬力は出てるはずだ。」

川「ほ・・・」

石「明日椿ライン行くぜとか言ってたから、きっと会えるはずだ。」

川「そうですね。有り難うございます。」

石「おう。そいじゃ。」  
ピッ

川「（プロ目指してる奴ね・・・それだけの腕がある奴なら、スラッシャー務めてるのも納得できる。）  
という事で、今夜も攻めに行く。」

20:11・・・

川「（そろそろだな。さて、今日は北側から行ってみますかね。）  
箱根新道を降りて、国道1号方面へ向かう。」

・・・その道中の出来事だった。

川「（・・・っ！）」

反対車線を走る二台のマシン・・・バトル中のその二台のマシンは、祐馬の標的としている二人・・・  
富士見フルパワーと、カメリアオーバースターだ。

川「（ここで遭遇するとは・・・）」

山「（あのシルビア・・・高田さんよ、今日も来てるみたいだぜ。）

「エボ10が前、インテグラが後ろの状態で、シルビアの横を疾走していった。」

川「(あいつが『カメラリアオーバースター』か・・・よし、ちょっと追走するぜ。)」

サイドブレーキを一気に引いて180度ターン、インテグラとエボ10を追う。

山「(・・・!?!?あいつ、追走してきやがるか・・・!!)」

三つ巴のバトルをする気はない。ただ、高田と話をしていただけである。

しばらく走り続けると・・・。

川「(・・・二台がスローダウンした・・・どういう事だ?まだ富士見峠すら終わってないぜ?)」

二台はそのまま、少し広い場所に停まる。シルビアも同様に、停まった。

川「(・・・そうか、あちらも俺と話したいのかい。)」

・・・二台のドライバーが降りてきた。祐馬も降りる。

「あんたが、この峠の走り屋達を倒していこうとしているS15・・・そうだな。」

川「ああ。そうじゃなかったら、ここに停まってないでスルーしてさ。」

「それもそうだな。山台、お前は行っててくれ。俺が話する。」

山「あつ、ああ。」

インテグラは戻っていった。

「俺は高田信介。『カメラリアオーバースター』って呼ばれてる者だ。スラッシャーを務めてる。あんたは?」

川「俺は川内祐馬、『シルバーナイトシャイン』と呼ばれる、首都高最速のシルビア・・・」

高「分かった。本当に首都高最速の奴が、この峠に来るとはな・・・まだこの地位についてたった一ヶ月つてのに、いきなり敗戦を味わ

いそうで危機感を感じてる。」

川「素直な気持ちがありがとさん。でも、悪気があってやってるってわけじゃないのを理解してくれ。」

高「大丈夫、そこは分かってるさ。こちらは正々堂々、限界を出して戦うつもりだぜ。」

川「そうか。ありがたいな。」

高「でも、樁ラインの走り屋を倒していくって話なら、まだバトルは先の方がいいか？」

川「ああ。」

高「だったら、何人でもいいから倒していけ。ここの走り屋達だって負けないためにマジで挑んでくれるはずだ。その後、この樁ラインの面々に勝ち続けることが出来たなら、俺が出るとしよう。」

川「それでいいな。悪いねえ、まだスラッシャーについたばかりってのに来ちまってよ。」

高「別にいいさ。むしろ、そのほうがやりがいがあるし。」

川「なら良かった。・・・お前さんも、俺が首都高の奴ってのに、案外友好的なんだな。」

高「まあな。俺はラリー攻めてる事があるんだが、そのときに首都高の奴と会うことがあるし、それに、樁ラインは十三鬼将も来てないから、そういう意識が薄いだけな部分もあるけどな。」

川「ラリーか・・・話を聞くところによれば、どうやらプロのラリー界に行くつもりらしいな。」

高「ほう、そこまで知ってるか・・・。だとすれば、プロを目指す者としての意地も見せなくてはならないか。」

川「へへっ、更にいい戦いをしてくれそうだな。・・・そいじゃ、俺は誰か倒してくる。」

高「そうか。北エリアのところなら、今日はそれなりに集まってるぜ。」

川「サンキュー。」

シルビアに乗り込み、国道1号方面へ再び向かった・・・。

川「(あいつがプロを目指すラリーストね・・・ランエボに乗るだけはあるみたいだな。まっ、まずは相手探して、この峠の有名になっただけだ・・・有名になって程、良さげな印象じゃないかもしれないけどよ。かといって、悪気も無いけどな。)」

しばらくして、駐車場に着いた。昨日と比べると大分集まっている。川「(そいじゃ、まずはどいつを相手にしますかね・・・どいつが強そうかは、今のところはマシン外観で判断するしかないか・・・)」

と思つたら一人・・・いや、その連れと思われる奴も一緒に、祐馬のS15に近づいてきた。

「よう、『エンカウトイーグルス』を負かした奴だろ？話は聞いているぜ。」

川「そうだ。FCに乗ってる奴だろ。そいつなら、俺が倒した。」

「やはりな・・・あいつも高田、山台に次ぐくらいの実力者、そいつを倒したら、俺らの目からは逃れられないぜ。」

川「ほう・・・自信はあるんだな。別に自慢するわけじゃないが、俺が首都高最速というのを知つての事だな？」

「もちろんだ。山台さんは知つてたらしいな。だが、余所者相手には負けたくないんでね。たとえ首都高最速だろうが、この峠最速チームとしての意地がある。」

川「なるほど、やはり余所者相手が勝ち上がるのは気分のいいもんじゃないか。そいで、やつぱりあんたらはチームなんだな。」

「おっと、チームといつたくせに紹介が遅れてたな。」

峠にだつてもちろんチームは存在するが、どちらかというと一匹狼が多い。チーム人数は大体2〜5人くらいが普通で、大規模なチームもある。

「俺らは『ダブルクロス』ってチームで、俺は『イービルホーク』こと山上勇樹つつもんだ。チーム名どおり、2人でやつてるぜ。俺のマシンはそこにあるシルバーのZ34だ。」

川「(Z34・・・あの顔のZにのって走り屋する奴がマジでいるとはな・・・)」

因みに祐馬はZ34フェアレディZはあまり好きではない。性能以前に、デザインが気に食わないらしい。

Z33のデザインを劣化してどうする!!との事。

山「そいでこいつが松垣太一だ。」

松「松垣だ。『エバーラスト』って呼ばれてる。山上の友人だと思ってくれば覚えやすいだろ。俺が乗ってるのは、あの白いセフィードだ。」

川「(セフィード・・・首都高でも時々乗ってる奴を見かけるな。)なるほどな。その二台で俺に挑む、か。」

山「そうだ。当然、引き受けてくれるよな?」

川「断わる理由が無いさ。もちろん、挑戦は受けるぜ。」

山「よし、ならば早速始めようじゃねえか。」

祐馬、峠で最初のチーム相手の戦いである。

川「(あの誇りを糧にして俺に挑んでくるか。お手並み拝見だぜ。)

松「まずは俺がヒルクライムで相手だ。北側のヒルクライムだぜ、いいな?」

川「ああ、分かった。」

セフィードとシルビア、スタートラインに並ぶ。すると、駐車場の走り屋達は一気にざわついた。

「おい、あれって『エバーラスト』だよ・・・?」

「本当だ・・・相手、首都高最速とか言うシルビアじゃねえか!」

「うげえ、マジかよ・・・まさかバトルするだなんて、『ダブルクロス』の二人が敵うのか?」

「まあでも、山上の事だから自分から突っ込んでっただらうな・・・いくら山上さんでも、そんな首都高最速だかを相手に挑戦状出せるなんて、正気かって思っちまうな・・・出来れば勝ってほしいけど、どうなんだろうな・・・」

既に祐馬は有名人だ。

川「（まずは北側ヒルクライム・・・その実力の限界、見せてみる・・・！）」

山「それじゃカウント行くぞ！！5、4、3、2、1、GO！！！！」

最初のレースがスタート。無難に前に出るS15。

川「（あちらのセフィードもいい加速じゃねえか。だが、俺には敵わないぜ？）」

松「（スタートダッシュで完全に負けちまった・・・！マジで信じられねえ加速・・・）」

第一コーナーへ。差が広がる事は無い。リアを振り、ドリフトして進入。

川「（コーナー進入がちょいと甘いぜ？まああの類にしちゃ妥当かもしれないけどな。）」

右コーナーへ。体勢を立て直して、再びドリフト。

松「（ここをあんな速さで曲がるだなんて、ありえねえ・・・カメリアオーバースター」と同じくらい、いや、もしかしたらそれ以上の速さか・・・！）」

川「（まだついてくるか、粘ってくるねえ・・・）」

松垣にかかるプレッシャーは既に大きかった。後ろにいるだけでも相当なものを感じる。

そんな中で、いつも以上のハンドル捌きを見せる。ついていくのは精一杯だ。

もちろん、シルビアは乱れない。椿ライン北の本気攻めは二回目ながら、祐馬のハンドリングに一切、狂いは無かった。

川「（次もドリフトで行きますかね。）」

先ほどのコーナーから180km/hまで加速した後140km/h程まで落とし、再びドリフトで進入する。

松「（あそこまで連続して完璧にドリフトを決めてくるか・・・！）」  
セフィードも段々と、シルビアから遠ざかっていく。間も無く箱根

新道のICだ。

川「(まだコースの4分の1も行ってないぜ?もつと来てくれよ・・・!)」

ここはあえてアクセルを緩めわざと近づけさせた祐馬。

松「(おおっ、これはチャンスか・・!?)」

セフィーロが真後ろまで迫る。

川「(あまり悪くは思わないでくれ。俺はただ、もつとバトルを楽しみたいだけだぜ・・!)」

松「(まだ抜けない・・くそっ、迫った勢いで行けるかと思ったが、ブロックに余念は無いか・・)」

ICを過ぎて、三連続のヘアピンがやってくる。連続したヘアピンでどれだけ速くいけるかは勝利のための重要な鍵となる。

川「(昨日走ったときもそうだったが、ヘアピン間にストレートが殆ど無いからな。不安定になればまずい・・)」

松「(次のヘアピンで明るい兆しが見えるといいけど・・どうなんだ・・!?)」

ヘアピンへ進入。150km/hでドリフトしていく。

川「(2つ目・・!)」

松「(やつぱここも敵わないか・・!?)」

続いて2つ目、シルビアは再加速、再び150km/hで進入する。セフィーロはあまり大きくケツを振らないようにドリフトし、抜ける。

ラインはどちらもベストだった。

川「(最後・・!)」

そのまま逆に振って直ドリ、そこからそのままヘアピンへ進入する。「すげーっ!二台とも迫力あるけど、シルビアはもつとすげー!!」

「こここの連続ヘアピンをあんな風にして切り抜けるなんてな・・・信じられねえぜ。」

松「(速い・・!ヘアピン処理が上手すぎる・・!)」

川「(これでまた差は広がったか。ただお前にとっての問題はこの

先だぜ。もうこのバトルで手は抜かねえ！」

問題というのも、この先の右コーナーを抜ければ孫助山を横目にするストレートが存在する。大して長くは無いが、セフィードとシルビアの加速差を比べれば、松垣にとっては大きな問題だろう。

川「(さあ行くぜ、右コーナーあ！)」

松「(この次のストレートはもつと油断ならないな・・・次の立ち上がりで上手くいって、アクセルを緩めなけ・・・なあっ!?)」  
シルビアは軽いドリフトで進入。松垣の目では、殆ど減速していない完璧すぎるドリフトに見えた。

松「(あっ・・・ありえねえ・・・)」

川「(・・・終わったな。)」

ストレートを駆けていく。このストレートだけで234km/hへ到達した。

その頃のセフィードは200km/hを丁度オーバーしたところだった。

緩い右コーナーを抜け、左ヘアピンを抜ける頃には、松垣の目にシルビアのテールランプは映っていなかった。

松「(ちぎられた・・・首都高最速は峠でもあんなテクを見せるのかよ・・・)」

ゴール地点・・・

川「(ここでフィニッシュだよな。っほー、今日はここも結構集まってるんだな。)」

溜まり場に止めて祐馬がシルビアから降りる頃には、セフィードがフィニッシュした。

松「神業だな・・・マシン性能でも全然敵わなかったけど、テクは俺の数倍上を行ってるぜ・・・」

川「サンキュー。あんたもセフィードにしてはいい感じの機敏な動きだったな。大体、600馬力は出てるだろ。」

松「いや、100馬力少ない500、正確に言えば512馬力だ。」



川「ほう、にしては結構踏んでいけるんだな。」

松「ああ。．．まあそれはさておき、そろそろ山上が来るはずだ。」

川「そうか。（さて、次はZ34だな。首都高で2回くらい、Z34とバトルした事あったな。まあ、どちらも走り屋気取りの残念な奴だったけど、これでいいバトルが出来ればいいな。）

松「．．．来たな。」

Z34がやってきた。

川「よう、リーダーさん。俺の勝利だぜ。」

山「そうか．．．。」

松「殆ど敵わずにちぎられちゃった。やっぱ、こいつは尋常じゃないくらい速い。」

山「でもお前は十分頑張ったと思うぜ。後は俺に任せろ。」

松「ああ。頑張れ、山上。」

山「やれるとこまでやってみるさ。．．．それじゃ、早速グリッドに並べてくれ。」

川「分かった。」

グリッドに並べる。

川「（次はダウンヒル．．．ヒルクライムよりも熱い戦いが多いであろうダウンヒルだ．．．あっちのZ34はどれだけの速さなのか．．．さあ、行こうぜ。）

山「（遂に来ちまったな．．．最低でも椿ライン最速チームの誇りを見せ付けられればいい。もちろん勝ちを狙うがな．．．!）」

S15対Z34．．．シルビア最終型とフェアレディZ最新型のぶつかり合いだ。

松「カウントオ!!!5、4、3、2、1、GO!!!!!!」

ダウンヒルがスタート。今回も前を取ったのはシルビア。

川「（セフィーロよりは速い、か。まあ他のメンバーよりリーダーが一番速いのは大概だよな。）

山「（この目で見るだけでも強烈な加速だ．．だが、負けてたまるか．．！）」

スタート直後は左コーナーが迫る。グリップで抜けた二台はそのまま続く右コーナーも抜け、左コーナーへ進む。

川「（ここはちときついが、まだその先にもっときつのがあるんだよな．．！）」

山「（既に70mくらいは離されてるか．．へアピン辺りでどうにか差を詰められないかどうか．．）」

天照山バス停を過ぎる。左コーナーも終わり、きつい右コーナーがやってくる。

160km/hで抜けるシルビア、140km/hで抜けるZ。コーナーテクはやはり祐馬の方が上か。

だが、Z34はシルビア並みの安定感だ。

川「（ライン取りがなかなかのもんだ。椿ライン最速チームのリーダーなだけあって、そこら辺は上級者だな。）」

山「（首都高最速．．まだあまり攻めていない峠であるの走りを見せるとは、つくづく、名ばかりで走っているもんじゃないことを実感させてくれるな。っと、そろそろへアピンか．．）」

間も無くへアピン。

川「（いけええっ．．！）」

山「（なっ．．．！）」

角度はきつめながらも、ハイスピードで駆け抜けるシルビア。Zはこれに敵わず。

山「（このへアピンをあんなスピードで駆け抜けるなんて信じられない．．．！）」

川「（ほぼ同じライン．．地元走りと同じラインで走れてるぜ．．！）」

スピードに差はあるがラインは殆ど同じだった。

川「（もういつちょ、へアピン行くぜ！）」

山「（次はどうだっ．．！?）」

再びヘアピンが迫る。170km/hから振って進入するシルビア。Zは160km/h、10km/h遅い。

川「(連続したヘアピンを抜けるのはやりがいがあるってもんだ。中間地点までにあと二つはヘアピンがあるな。)」

山「(このヘアピンでも劣ってしまおうか・・・くそっ、やっぱ速すぎる・・・!!)」

山上に段々と焦りが見えてきた。

山「(辛うじてついていけるのは幸いか・・・このままじゃあ、大観山で終わっちゃう!)」

最速チームの誇りを胸にスタートしてる故、こんな早くは負けられないのだ。だが、祐馬はその誇りを打ち破り、更に引き離していく。川「(次のヘアピン・・・ここだっ!)」  
ブレーキングタイミングを上手く計り、その通りにペダルを踏み込んだ。そして、高速ドリフトを決めてみせる。  
Zもその後が続く。ラインは同じだが、やはりスピードで劣る。

川「(もう大分差はついた・・・これで終わりにする!)」

山「(ここで負けてたまるかあっ・・・!!)」

次のヘアピンが迫る。二台は200km/hへと迫った。

「うおお、来たあ!!イービルホークとシルバーナイトシャインだ!!」

「シルビア、セフィーロのときもすげえドリフト見せてたけど、今回・・・ちよっ、こんな時に一般車・・・!？」

「なっ、マジ・・・!？」

一般車の軽バンが反対車線を通っている。この様子だと・・・ヘアピンを攻めている最中のシルビア&Zと同じタイミングでヘアピンに入るかどうか・・・

川「(・・・ほう・・・難易度上げやがって・・・)」

ヘアピン直前、再びブレーキングドリフトを決めようとしたところで祐馬が反対車線からのライトに気づく。

後ろの山上は気づいていない。

川「（でも、面倒だが軽いもんだ．．．！！）」

構わずブレーキングドリフト．．．

そして祐馬は、普通なら命がけのテクを成して見せた。

「うわあっ、避けるおっ！！！！！」

「ぐあああっ！！！！！」

山「（なんだありや．．．ありえねえ．．．！！）」

バンを避けるため、インを開けてヘアピンに進入。必然的にアウトラインで抜けることになるが、これをドリフトしながら、車線ギリギリで抜けて見せた。

ガードレールにこすりそうで全くこすらなかった。ギャラリーが咄嗟に逃げるのも無理は無い。

川「（ふう．．．こんなの初体験だけど、落ち着けば普通に抜けられる．．．）」

そしてZが続く．．．と思いきや。

山「（くそおっ．．．！！）」

一般車に気づいたが上手く処理できず、スピンする。完全にバトルの決め手となった。

川「（終わったな．．．）」

山「（このバトルの俺の末路がこんなスピンとはな．．．やっぱり、無理だったか．．．）」

Zは完全にちぎられた。もうシルビアに追いつくことは絶対に不可能だろう。

リーダー戦、勝利を掴んだのは祐馬となった。

「ひえええ．．．あんなギリギリなドリフト、初めて見たわ．．．

間近で見られるもんじゃないな．．．」

「ああ．．．一般車がいるってのに、お構いなしにドリフトとは．．．」

「怖かったけど、あんなテクはそうそう見れねえだろうな．．．首都高のテクも舐めたもんじゃないってことか．．．」

山「お前さんの完全勝利だ。あんたがアウトですげえドリフト見せてるもんだから、一般車なんて全然気づかなかったさ。」

川「ほーう。でも事故らなくてよかったじゃないか。」

山「それもそうだが、お前さんのあのドリフトは本当、凄かったな。」

川「サンキュー。それじゃ、俺は次の相手を探すんでね。」

山「おう。じゃあな。」

祐馬は再び、別の走り屋を探しに行った。

この日、祐馬は通算4勝を遂げ、帰宅した。

幸「そうか・・・今日も連勝か。」

川「ああ。親父は？」

幸「お前と同じく。」

川「そうか。なら良かったぜ。」

幸「・・・どうだ、走りは？何日か攻めてさ。」

川「大分良くなってきた。ベストラインも構築できたし、後は速く走るだけだ。」

幸「そうか。なかなか覚えが早いじゃないか。」

川「まあな。数回走れば、大体は対応できるし。」

幸「なるほどねえ・・・。」

祐馬も大分椿ラインのコツを掴めてきたようだ。ベストラインも構築できている。

後はとにかく敵を倒すのみ・・・。

その後、眠りについたのだった。

次の日・・・

川「(さーて、今日も今夜に備え・・・って何も備える事は無いけどな。強いて言えば、バトルに勝てるという自信くらいだが・・・)」

┌

川「(うおっ、石田さん……)」  
ピッ

川「もしもし?」

石「よう、祐馬。高田の奴だが、『椿ラインにやってきた、お前らと同じ首都高の走り屋のために腕を磨くからしばらくラリーには来ない』、だよ。昨日高田と会ったメンバーが聞いたらしい。」

川「ほう、自主練で俺とのバトルに十分立ち向かえるようにするって事か……。」

石「みたいだな。あいつもそれなりに本気ってことだろ。まっ、そうならざるを得ないけどな。お前みたいな奴が来ちまったらよ。」

川「ですね。……そういや昨日話す機会があっただんですが、結構親しく接する人だったすよ。」

石「そうか。まっ、そこまで敵対視してるわけじゃないみたいだしな。内心はマジだけど、ってな。」

川「そうですね……。」

石「ランエボ10で峠、あいつのランエボも結構チューンしてあるから、いいバトルもしてくれと思う。まっ、あんま奴と話をすることが無い俺が言うのもなんだけどよ。」

川「まあ、いいバトルをしてくれるんですから、期待しますよ。」

石「だな。そいじゃ。」

ピッ

川「なるほどねえ……(走り込みってとこかな……)」

幸「おう、おはようさん。今日は寝坊しちゃった。」

川「おはよう、親父。久しぶりにぐっすり寝れたんじゃないか?」

幸「そこそこ、な。」

そうして今夜も攻めに行く。

夜、椿ラインへの道中……

川「(あっちも本気で挑む準備をしてくるか。俺ももっと攻め込ん

で、備えないと。・・・さあ、着いたぜ。」

まずは北のスタート地点へ・・・。

川「（誰もいねえ・・・今日はあんま集まらない日なのかな・・・）

「  
駐車場はガラガラである。バトルしようと思っていたが、この有様なら、椿ラインを攻め込むしかない。

川「（そいじゃまた、この前みたいに行きますかね。）」

180度ターンさせ、アクセル全開・・・

川「（ちよつと待て・・・パッシングだと・・・？）」

アクセルを思いつきり踏み込もうとした直前、後ろからパッシングされているのに気づいた祐馬。

川「（この峠でもパッシングでバトルを申し込む奴がいるとはね・・・マシンは・・・）」

マシンを確認する・・・

あれは・・・日本車じゃない。

川「（ジャパニーズ製じゃない相手・・・あのマシンはBMW・・・M3の最新型か・・・!!）」

BMW M3。3シリーズを基にして作り上げたBMWでも有名なスポーツカーだ。

相手に乗っているのは最新型のE92・・・見る限りではチューニングを施しているに違いない。

「（博麗の巫女と霧雨の魔法使いが知り合いになったとか言うS15・・・この独特の雰囲気はそうかしらね。椿というからやってきたのに全然椿が無かったから残念だったけど、ある意味来て正解だったかしらね。さあ見せなさい、その首都高最速とやらの実力をね。」

川「（さあ行くぜ。久しぶりの外車相手、楽しませてくれよ・・・!）」

「  
改めてアクセルを一気に踏み込む。バトルがスタートした。

川「（ほう、いい加速だな。俺のマシンについてこれる程か。）」

M3も加速は大分速い。

そしてすぐに最初のコーナーが迫る。

川「(コーナリングはどうだ・・・?)」

ドリフトでヘアピンを抜ける。M3は・・・

川「(軽めに振ってドリフトか・・・なかなか上手いな。)」

相手はアクセルワークでドリフトさせていく。まあ、祐馬も同様だったのだが。

続く左コーナーも、祐馬と互角の腕を見せていた。

川「(・・・けど、地元の奴って感じはしないんだな、これが・・・)」

地元仕込ではない、別の雰囲気を感じ取った祐馬。

川「(余所者の走り屋なのかどうなのか・・・)」

「(上手いじゃない・・・完璧なブレーキングタイミング、そしてコーナリングライン・・・この2つのコーナーを抜けてそれを感じるなんてね。やはり、侮れないわ。)」

ICの横を過ぎ去る。

川「(けど、今まで見てきて、あの走り屋はきつとただもんじゃない、ってのは分かるんだよな。こりゃ、どこまでバトルが続くかね・・・さ、またヘアピンだ。)」

ヘアピンに向けて210km/hから一気に150km/hへ、そのまま滑らせてアウトから進入する。

M3も同じく150km/hでドリフト・・・

3つのヘアピンを抜けて尚も差は広がらない。

川「(ついてくる・・・差が広がらねえ・・・これはしばらく心理戦か・・・)」

「(煽ってるのに乱れない・・・それどころか、ベストラインでコーナーを抜け続ける・・・!)」

間も無くストレートが迫る。ここである程度引き離せるか。

川「(次でちつとは離せるはずだが・・・どうなるか・・・)」

ストレートへ進入・・・



川「(若干食いつくか……っ!だが、離れてるのは確かだ!)」  
「(加速では分が悪い……やはりコーナーリングで行くしかないわね……!)」

思いつき踏み込んで226km/hをマークしたのはシルビア。  
M3は204km/hで追う。

そこから減速し、ドリフト。

川「(…なっ、脱出速度はあつちが上か…?ペースを上げてきたのか、それとも……)」

「(立ち上がり重視でも無理ね……加速も上でコーナーリングテクも上、この状態でどう逆転させるか……)」  
順調なペースで進むシルビアに対し、ペースを上げて追い上げようとするM3。

ただし、差は段々と開いてくる。

しばらく走って、2台の差は150m。あと少しでちぎれるシルビア。  
ア。

川「(もうすぐ北エリア終盤……4つのヘアピンで勝負を決められるかどうか……!)」

「(初めてのコースでも十分な走りを見せてると思うのにこの差じやあ駄目ね……。くそっ……!)」

ヘアピンを抜けるシルビア。その後すぐにM3も抜けていく。

差はちぎる寸前、だがここで祐馬は感じた。

川「(……これで終わりじゃ無さそうだな。そんな予感がしてきた。まだバトルは続く……少なくとも、後3つヘアピンを抜けるまでは、な。)」

……さっきよりも若干、バックミラーに映るM3のライトが強かった。

だが、嫌な予感を感じた、というわけではない。あくまで差を少し縮められただけ、ここから手を抜かなければいける。

しかし……この後のコーナーで、一切M3は離されなかった。

川「(スパートをかけてきてるようには見えないが……ここで終

わらせてくれなそうなのは確か、だな。」

次のヘアピンも抜けるが、差は依然広がらない。

「（ここでも無理ね・・・）」

更に次のヘアピン、そして次と抜け、北エリア部分を終える。

二台はそのまま、南エリア部分へと向かう。

川「（ここまで粘ってきやがるか・・・！あそこのヘアピン抜ける前まではちぎれると思っていたが、そうではなかったか・・・）」

「（これでもギリギリのスピードでベストラインを通ってるはずなのに、これじゃただ粘ってるだけ・・・くっ・・・！！）」

・・・M3のライトがバツクミラーから消えた。

川「（なっ・・・？・・・そこで、降参・・・か・・・）」

M3が追いついてくることは無い。M3はギブアップ。

祐馬の勝利となった。

川「（ギブアップで終わるとは。ここまで続けたけど、あっけない終わりだったかな・・・）」

何となく疲れてしまった祐馬。

川「（こりゃあ、椿ライン最速達との前に一ふん張りしちゃったのかね・・・M3、速かったな・・・）」

しかし速い相手とのバトルで、高田、その前の山台とのバトルへの備えは完璧となった・・・かもしれない。

川「（M3とやってる間で、昨日と比べて結構ラインが上手く取れた気がするんだな。）」

そしてそのまま、軽く攻めて帰宅した。

幸「M3・・・最初の型なら、誰かとバトルした記憶があるな。」

川「へえ〜。」

幸「今日の収穫は、そいつだけか。」

川「ああ。たまり場に誰も溜まってなかったし。でも、結構大きい収穫だったと思う。あちらさんも上手かったしな。」

幸「そうか。そりゃあ良かった。」

そうして二人は就寝した。

川「（・・・そういや、やっぱりあのM3は地元の奴だったんだろうか？それとも、思ったとおり他所もん？）」「  
そんな事を考えていたが、すぐに眠りについた。

あのドライバーと会わなかったものの、次の日に正体は分かった。

昼・・・

（  
霊夢からの電話だった。

ピッ

川「もしもし？どうした？」

博「ああ祐馬、昨日あんたが攻めてた椿ラインに、M3がいなかった？BMWの。」

川「いたな。というか、そいつにバトルを挑まれた。高速道路の方式でな。」

博「高速の方式・・・となると、顔を合わせてはいないわね。」

川「まあ、な。バックミラーから確認しようとか思わなかったし。」

博「あいつは風見幽香、幻想郷でも結構古い妖怪よ。」

川「幻想郷の・・・それなりに有名なのか？」

博「まあ、腕ではね。紫には敵わないらしいけど。」

川「通りで上手い癖して、地元っ風があまり無い感じがしたわけだ。」

博「椿ライン初めてらしいけど、そんなに速かったの？」

川「ああ。北エリアで持ちこたえてきた。その後、あちらからギブアップだ。」

博「へえ・・・幽香が椿ラインに行くって言う話は聞いたけど、丁度あんたが攻めてる峠だったから、会ったかどうか聞きたかったのよ。」

川「なるほど。となると、色んな峠攻めてる奴なのか。」

博「ホームコースは無いけど、主に花関連の名前がつく峠を攻めて

るわ。」

川「花関連？・・・そういや、椿、か・・・。」

博「そんな花関連の名前がついた峠ってあまり無いから、それ以外の峠攻めることが多いみたいだけど。もしかしたら、もう一度会うかもしれないわよ。」

川「そうか・・・。分かった。ありがとうさん。」

M3もそれなりにチューンしてあった。更にある程度は祐馬についてこれる。

これが、彼女が一番速く走れる峠だと、どうなっていたか・・・。少し、祐馬が気になった点である。

博「礼はいらないわよ。ところで、椿ラインのスラッシャーはそろそろなの？」

川「そろそろっっちゃあそろそろだな。『富士見フルパワー』が出てくるだろう。その後、本命だ。」

博「そう。とにかく、頑張りなさいよ。」

川「あんがとさん。そいじゃ。」  
ピッ

川「（風見幽香・・・幻想郷の奴だとはね。流石に車の向こうからじゃ分からなかったな。そう考えると、雰囲気はそんな感じだったか。）」

祐馬の中に、再戦の予感是十分にあった・・・。

川「（が、また椿ラインでって事は無さそうだし、今はインテグラ、そしてエボ10だ。まずはインテグラが、今日出てきてくれればいいんだけどな。）」

早く祐馬は、そいつらとバトルをしたくなった。

そろそろ椿ラインはクライマックスとするつもりだ。

川「（果たして、どうなるか・・・）」

幸「おう、電話終わったか。」

幸之助がやってくる。

川「ああ・・・。そういや親父はBMWのM3に乗ってる奴とバト

ルした事あるか？」

幸「M3?・・・あつたな。E30の相手だ。」

川「E30・・・初代モデルか。」

幸「もう大分前の話だからあんま覚えちゃいないけどな。それなりに速かった記憶がある。」

川「なるほど・・・。」

そんなこんなで夜、箱根新道にて・・・

川「(あと少しか・・・来てるような予感はあるがな・・・)」  
芦ノ湖大観ICで降りていく。

しかし料金所を過ぎたとき、だった。  
パツパツ

川「(っ・・・!?!?・・・こんなとこでパツピング・・・!?!?)」

後続のマシンがパツピングしてきたのだ。その雰囲気から走り屋である事を察知する。

川「(マシンは・・・黄色のインテグラ・・・!)」

黄色のインテグラ・・・エアロはスプーン製・・・  
確実にアイツだ。

川「(『富士見フルパワー』・・・!)」

こんなとこで仕掛けられるとは思っていなかった。

山「(どうせだからここで始めようぜ。早く攻めたくてうずうずしてたからよ。・・・容赦はしねえからな。)」

川「(まあ、すぐそこが椿ラインだから始められるっちゃあ始められるな、椿ラインのNo.2さんよ。よし・・・)」

一度シルビアを後退させる祐馬。インテグラの背後につく。

山「(後ろにわざとついた・・・なるほど、後追いスタートか。いいじゃねえか、自信满满々だよ。だが、それを仇にさせてみせる。)」

川「(このほうがちよいとは面白くなるだろ。さあ、行こうぜ?)」  
T字路でスタートを待つ二台。インテグラがアクセルを踏み込めば  
スタートとなる。

周りの道端にはギャラリーがぼちぼちと並んでいた。

「おつ、おい、あのインテグラ、『富士見フルパワー』じゃねえか？」

「本当だ！誰も通らないってのに何で止まってるんだ？」

遠目で見ていたギャラリーは、後ろのシルビアの存在に気づいていない。

そして・・・

グオオオオオオツ！！！！

「うおつ！インテグラが飛び出した！そのまま攻める気が！？」

「いや、ちよつとまで・・・おい、あのシルビア、最近ここに攻めて来てる首都高最速のやつじゃねえか！！！」

「マジだ！もしかして、インテグラはあのシルビアのバトルをあそこで受けたつてののか！？」

そう、二台がスタートした。

川「（出だしが予想を完全に上回る速さだな・・・エボ10の続くN0.2なだけに、マシン性能も結構なものか。）」

インテグラのスタートダッシュは祐馬の予想を上回った。交差点を左に曲がると一気に加速していく。

川「（VTECは相当なチューンを施してあるみたいだな・・・）」  
シルビアはというと、左に曲がった後同じく一気に加速。インテグラが前にいるため満足なものではないが。

山「（あの180度ターンの後の加速・・・）」

祐馬が最初に来たときの話だ。

山「（あの時のダッシュと比べたら抑え気味か・・・俺が前にいるからだろうな。）」

このままヘアピンに突っ込んでいく。二台とも200km/h弱からブレーキングする。

川「（上手い具合に旋回しやがったな・・・）」

ヘアピンをクイックに抜けていくインテグラ。ハンドリングを最小

限に抑えつつ、限界速度で抜けていく。

とはいえ、シルビアは3つのヘアピンを抜けるまで順調についていた。

速度はほぼ同じ、ラインもほぼコピーしている。

川「（あと少しもすればオーバーテイクを狙える。そこであつちがどう対策してくるか・・・簡単には抜かせちゃくれないだろう。）」

山「（ぴったり同じラインを駆けてきやがった・・・こんな事、初めてだぜ・・・だが、まだ焦っちゃあいけないな。この先にはストレート気味の区間があるしな・・・）」

右コーナー・・・

山「（ここだっ・・・!）」

川「（そこで加速か!）」

アウト・イン・アウトのインの瞬間にアクセルを踏み込んで絶好の立ち上がりを見せるインテグラ。

若干シルビアは出遅れたが、それでもインテグラを抜くには十分な加速。

山「（これでもカバーしきれないか・・・あのシルビアとの加速差は・・・!!首都高最速は伊達じゃねえ、速すぎる・・・!）」  
右コーナーが迫る。

インテグラはインから入ろうとする。シルビアはアウトから狙う。

川「（ここで多少突っ込み気味に行けば、最低でも並べるはず・・・だが、どうだか・・・）」

インテグラはブレーキング。1テンポ遅れてシルビアもブレーキング・・・

インテグラがアウトによってきた。

川「（意地でも抜かせねえかつ・・・!）」

山「（くっ、少し危ない手だったな・・・意識してやったつもりは無いが・・・抜かせるわけには行かない・・・!!）」

そのまま後退する。直後並びなおそうとする祐馬・・・しかし。

川「（ちっ、対向車か・・・）」

こちらに向かってくる一筋のライト。これでは並びなおせない。  
山「（ここで対向車がなかったら完全にピンチだったか・・・）」  
一般車を避ける。その後、二台とも順調なペースで抜けていく。

その頃、富士見台バス停付近にて・・・

「おい聞いたか？北エリアでインテグラとシルビアのバトルが展開  
されてるらしいぞ。」

「インテグラってまさか、『富士見フルパワー』!？」

「ああ。」

「つてことは、シルビアはあの首都高の奴か！」

「みたいだな。箱根新道のICからスタートしてったらしいぜ。」

「うげえ・・・『富士見フルパワー』は大丈夫なのか・・・？あのシ  
ルビアに敵うのか・・・？」

「どうなんだろうな・・・まあ、俺らは結果を待とうぜ。」

そんなギャラリーの会話を横目に・・・

・・・そこには、高田がいた。

高「（・・・山台の奴、遂に戦いを始めたか・・・あのシルビアに  
どれだけ見せ付けるか、その腕を・・・）」

高田は一瞬、微笑んだ。

高「（このまま椿ラインでのバトルを楽に終わらせはしない。いや、  
制覇させないのは俺らの役目だ。山台、頑張ってくれ。）」

川「（きつちり抑えてきてるな・・・だが、そろそろ終わるかもな  
・・・）」

現在富士見峠バス停を過ぎた辺り。

段々とインテグラの拳動が乱れてくる。コーナリング出口では必ず  
ふらついた。

川「（ふらつくが故に危険で抜けないんだけどな。だが、ふらつい  
てるって事はチャンスが出来る可能性は大ってわけだ。）」  
山台は守るのが精一杯だった。



山「(くっ……ここまで守りきれたなんて奇跡かもな……走れば走るほど、体に負担がかかる……!)」

バクミラーを見るだけで、シルビアからひしひしと体に伝わってくる何か。

先ほどまでは大丈夫だったが徐々にきつくなってきた。もうすぐ限界か。

川「(さて、そろそろ終盤か……抜きたいところだが……)」  
インテグラは順調とはいえない。それに反してシルビアは至って好調……といっても、まだ後ろだが。

川「(このままどこまで粘ってくるか……ふらついてるってのに、中々抜かせてくれないとはな……)」  
実のところ、祐馬は多少の焦りを見せている。

川「(きつければきつい程能力が向上するとかの類か、それとも……チャンスを作らせてくれないなんてよ。)」  
それでも、勝てる自信はあった。

山「(次は低速右……)」  
グリップで駆け抜ける。コーナー出口でまたもふらついたインテグラ。

川「(これは……そろそろ吹っ切れるかもな。)」  
そろそろ……いや、その次のコーナーだった。  
シューアアアアツ!!

川「(よしっ、このままアウトからいけるかっ!?)」  
山「(くうっ……!!!)」  
コーナーリング中にアウトへもぐりこむ。  
そのままコーナー出口で抜いていった。

川「(さあ、ここから一気に終わりで行こうぜ。どこまでついてくれる!?)」

そう思った時、である。

川「(……っ!)」

祐馬は何かを察知した。

インテグラのリアがスキル音と共に一気に振れていく・・・

キイイイイツ!!!!

山「(うああっ・・・!!!!)」

川「Oh・・・」

インテグラが続いたコーナーにてスピンした。

川「(抜いた直後にいっちまうとは・・・まあ、これで俺の勝ちって訳か・・・)」

これで祐馬の勝利が決まったのだ。

川「(ん・・・?)」

山台がマシンから降りてくる。

川「(降参、か・・・)」

と、祐馬は確認すると、マシンを端に寄せ、同じく降りた。

川「降参、か。」

山「ああ・・・守りきれたはずなのに、ここで一気にいっちまうとはな・・・」

川「でも驚いたぜ？まさか俺をあそこまで抜かせてくれないだなんてな。最後の方も、焦ってるような挙動のわりに、きっちり俺を守ってきてたし。」

山「そつ、そうか・・・ありがとよ。」

こうしてバトルは終わった。

山「すげえな・・・追走されてるだけなのに、このプレッシャー・・・」

川「こっちはプレッシャー勝負もあるからな。相手にそれを送るのも、鍛えてあるって言うか・・・まあ無意識なだけだな。」

山「なるほどね・・・しっかし、前にいる機会が多かったとはいえ、こんな負け方とは・・・」

スピンして停まったインテグラを見ながらそう言った。

川「スピンは状況によつちや致命傷だからな。」

山「お前が始めてだ。俺をプレッシャーで追い詰めてスピンさせたのはな。」

川「そうか。．．．あんましショックは受けて無さそうだな。」

山「まあ．．．そんな事もねえぞ。万全の体制で挑んだし、腕には自信はあつたし。」

川「なるほどね．．．」

その後．．．

山「．．．．一台来るぞ。」

川「エンジン音からして、走り屋か。」

だが直後に、祐馬は思い出した。

川「．．．このエンジン音．．．なるほど。」

山「エンジン音．．．？．．．そうか、これは．．．！」

二人とも、そのエンジン音からマシンを当てた。

川「あのランエボか．．．」

山「高田、来てたんだな．．．」

ブルーのランエボ10、「カメラアオーバースター」だ。

高田が降りてきた。

高「どうやらこの様子だと．．．山台のスピンか。」

山「ああ．．．前を行っていたんだがな．．．プレッシャー負けしちまった。」

高「そうか．．．」

山「高田が出てきたからには、俺に用はねえな．．．せいじゃ、俺は行く。」

高「ああ。」

インテグラに乗り、去っていった。

川「遂にお出ましか、『カメラアオーバースター』。」

高「そうだ。お前とインテグラがバトルしていると聞いたからな。」

俺の心の準備は万全だし、あいつが負けたらすぐに挑もうと思ったのさ。」

川「心の準備は万全、か。いい自信だ。」

高「ああ。それくらいないと、プロは目指せないからな。」

川「プロか・・・」

高「本当なら明日、ワークスの誘いでテストがあるんだがな。その前にお前と一戦交えれば、いい腕上げになるかもしれないってよ。」

川「明日だと?」

高「ああ。ターマックとグラベル混合の山道を走りまくるだけなんだがな。」

川「ふ〜ん・・・」

本当にプロを目指す気だ。

高「この椿ラインも、俺の家から近いし、そこそこの難易度だから俺の練習場所としては丁度よかったんだ。そしたらいつの間にかスラッシャーとはな。」

川「ほう。それでも誇りは持つてるってか?その顔だと。」

高「ああ。・・・その威信を賭けて、お前を討つ。」

二人の間に、凄まじいオーラが現れた。

二人とも、強い自信を持って挑む。

川「ふっ・・・よし、遠慮なくやらせてもらおう。たとえスラッシャーになりたてだろうがプロラリーストだろうがな。」

高「コースはここから南エリアフィニッシュまで、いいな?」

川「OK。」

北エリア終盤の4つのヘアピンの手前からスタートする。椿ライン全体の4分の3を走るコースだ。

川「(そこそこの長さだが大したもんじゃないぜ・・・さあ、行こうぜ。)」

二台はグリッドに並ぶ。

高「俺の合図でスタートだ。いいな?」

川「OK。それで問題ないぜ。」

そして丁度10秒後・・・

グオオオオツ!!!

川「(来たなっ、いけえ!!!)」

ランエボがスタート。続いてシルビアが追いかける。

高「(加速が良すぎる・・・スタートダツシユが尋常じゃない・・・!)」

川「(集中していたが若干出遅れたか・・・でも、最初のコーナーで突込み気味に行けば前はとれるか・・・?)」

スタートが若干出遅れた(まあ必然的でもあるが)シルビアだったが、加速でカバーしていく。

ヘアピンではシルビアがイン側・・・既にシルビアのフロントはランエボのリアに並んでいた。

高「(ちっ、させるかっ!)」

被せ気味にシルビア側へハンドルを切り込む高田。

川「(くそっ、気づかれるのが早かったか・・・!)」  
仕方なく減速するシルビア。その直後、二台はヘアピンを抜けていった。

川「(最初は後ろだな・・・仕方ねえ。どこでチャンスが出来るか、それまで煽ってやるぜ。)」

余裕を見せているようではあるが実際には結構マジである。

一方高田は祐馬の与えるプレッシャーを恐れていた。

高「(山台のスピも恐らくは精神が保たなくなっただからだろう・・・あいつもああ見えて相当強靱な精神の持ち主だ。そいつがまさかスピン・・・)」

山台を自分の次に速いという者としてみるとそんな事を知ってしまっていた。

高「(ちくしょう・・・別に何かしてくるわけでもねえのに、後ろにいられるだけでプレッシャーを感じる・・・だが耐えて見せよう・・・!!!)」

改めて気合を入れ、アクセルを一気に踏み込む高田。

川「（おっ・・・一気に気迫が立ち込めやがった・・・!）」  
それに気づいた祐馬。ランエボからふつふつと立ち込めるようなオ  
ーラを感じ取る・・・。

高「（負けるわけにはいかねえ・・・!）」  
二台は次々とコーナーを駆け抜けていく・・・。

とあるヘアピンの道端・・・

「・・・本当に来てくれたか・・・迅帝も協力してくれて良かつ  
た。」

過ぎ去っていく二台のマシン・・・シルビアとエボ10を見つめた  
男。

そこらにもギャラリーはいたが・・・妙な雰囲気醸し出していた。

「（後ろにいるとはいえ、このままシルビアが勝利するか・・・エ  
ボ10も全力でそれを阻止して見せる・・・さあ、どこまでたどり  
着けるか・・・その先で待ってるぜ・・・!）」

川「（上手い・・・さっきの山台より1枚上手と言った所か・・・絶  
妙なブレーキングからそのまま一気に駆け抜ける・・・）」

現在北エリアを終えたところ。いまだエボ10はシルビアの目の前  
を先行中。

高「（この数日間でこれだけの精度・・・よくあそこまでのド  
ラテクを培ったもんだ・・・）」

感心する高田。

高「（そんな事言ってる場合じゃないか・・・次の区間、アクセル  
全開!!!）」

今抜けている左コーナーの次、右コーナーを抜ければ短いストレ  
ートに入る。シルビアの加速に負けるわけには行かない。

川「（次で一気に仕掛けられるかどうか・・・やってみるしかねえ。  
）」

右コーナーへと入っていく・・・

高「(さあ、抑えろっ!)」

川「(抜けえええっ!)」

コーナーを抜ける・・・シルビアは抜けない。

川「(ちっ・・・!)」

片車線に一般車・・・。

川「(くそっ、ならば次のコーナー、そして更にその先か・・・)」

高「(安心できない・・・さあ、次のコーナーだっ・・・!)」

現在180km/h・・・二台はコーナーを抜ける。

川「(ここはどうだあっ・・・!)」

高「(行かせねえ!!)」

一般車はいないが完全にブロックする。

川「(またしてもか・・・くそ・・・)」

間も無く南エリアへ進入する。

よりテクニカルなエリアへと、二台は迫っていく。

高「(次からは・・・気合切らさずいかねえと・・・)」

ランエボ先行、シルビア後追いのまま、樁ラインを駆け抜ける。

「おおおっ、『カメラリアオーバースター』と首都高のシルビアのバ

トルだ!!」

「すげえ、シルビアとエボ10の差が全然ねえ!」

「カメラリアオーバースター、あのシルビアにどこまで対抗できるん

だ!?!」

ギャラリーも熱狂に沸く。

高「(さあ・・・行くぜ!)」

減速し、右へアピンへ進入・・・

川「(・・・見えたっ・・・!)」

川「(・・・見えたっ・・・!)」

一瞬の隙は見逃さない。

高「(くっ、しまった・・・っ!!!!)」

へアピンを抜けた後のランエボはアウト側。イン側にはぼっかりと

隙間が空いている。

祐馬はそれを突いた。

若干減速しつつも、そこからの加速の勢いでもぐりこんでいく。

川「（ここで前に出させてもらうぜー）」

そのまま並走する二台。

しかし、シルビアは加速で徐々に前へと出て行った。

高「（ちくしょう、次のコーナーはアウトか・・・!）」

次のコーナーも右・・・ランエボはアウトで進入する。

川「（よっしや・・・!）」

そのままランエボをパス。

川「（後はこつからどうなるか・・・抜かせないためにも、限界走行を切らせはしねえ・・・!）」

高「（まだ終わっちゃいない・・・!必ず抜き返さないと・・・!）」  
一気に加速していく。

まだランエボは、シルビアの背後を捉えていた。

川「（いいぜ、その食いつき・・・!すぐに離れられちまうよりはな・・・!）」

いくつものコーナーが続く中、二台はミス無く、高速で走り抜けていく。

高「（すげえ・・・この区間をあそこまでのスピードで駆け抜けられる奴が他にいたとは・・・まあ、やりかねない奴だけだな。とはいえ、この数日間走るだけであそこまで・・・）」  
祐馬のテクは最速である者から見ても凄いといえるものだ。

ハイスピードエリアの首都高で培ったとは思えないほどのコーナリング精度、寸分の狂いも無いブレーキングタイミングetc・・・  
高「（あんなテクを持っていて、首都高だなんてもつたいない気もするが、な・・・）」

一方・・・

川「（ここまでコーナーが続いている区間を限界速度で抜けていくのはいい気分だな。ミスしたら気分ガタ落ちだろうけど。にしても・



「・・・まだ離れないか・・・」

差は大したほどではない。

高「（まだまだ・・・南の半分も終わっちゃいねえ・・・諦めない！）」

そしてまた、ヘアピンを駆け抜けていく。

川「（・・・ここまでもついてくるってか・・・おもしろえ・・・！）」

祐馬はハンドルをさばきながらランエボを見る。

高「（まだ無理なのかよ・・・っ・・・！）」

その直後のコーナー・・・

川「（・・・何っ!?!）」

祐馬は油断はしていない。ラインだって乱れてないし、スピードも絶好だ。

だが・・・残念ながら隙が出来た。

川「（そこから入り込むだとお・・・!?!）」

高「（そこだああっ!?!）」

アウトから一気にインの隙間へとフロントを向けるランエボ・・・立ち上がりでシルビアと並ぶ。

川「（ちくしょう、抜かれちまうのかよ・・・!）」

続くコーナーでインからパスされた。

高「（こいつ相手に抜き返したのは素直に嬉しいぜ。二度と抜かせはしない!?!）」

まさかあんな拳動でパスを挑んでくるとは思わなかった。

・・・やはり、最速は侮れない。

川「（ちくしょう・・・まさか、ここでとはな・・・）」

コースは南エリア半分を終えた。

ゴールは近い。

・・・が、もちろん祐馬は諦めはしない。

むしろ笑みを浮かべた。

川「（これでバトルは更に面白くなるってもんだ．．！こっから続いていくコーナー、十分抜ける可能性はある！）」  
コーナーリングで勝ってみせる．．今はそんな思いがあった。  
椿ラインクライマックス、終盤へと差し掛かる。

高「（前についたらついたでまたこのプレッシャーか．．！）」  
後ろにつかれるだけで、肌で感じるほどの尋常なプレッシャー。  
しかし高田はまだ耐える。

高「（負けるわけにはいかねえ、スラッシャーとしての誇りにかけて．．ううっ．．！）」

しかし．．．高田がハンドルを握る手は汗だけではなく、震えを伴っていた。

川「（．．．僅かなチャンスがあったら潜り込んでいかねえと．．）」

ランエボに張り付いて走行するシルビア。  
ここから中速区間、その後最後のヘアピンが迫る。

川「（．．．ケツの振りの立て直しが遅い．．．抜き返した直後つてのに、もうあつちは限界か．．．？）」

高「（くそっ．．．！思うように手足は動いている、なのに何故．．！?）」

ランエボはそのまま走り続ける。シルビアも後を追う。  
最終ヘアピンへと進入する．．．

高「（．．．何っ．．．!?）」  
川「（残念だったな!）」

インは占めたランエボ。そこからコーナーリング．．立ち上がりだった。

アウトで脱出したランエボ。同じラインで走っていたシルビアだったのだが．．．

いつの間にか、並ばれていた。

高「（こっ．．．こっでえっ．．．）」

焦りから絶望へと落とされた。

川「（終わりだ。このままゴールに向かう！！）」

二台はゴールまで一直線。もう抜く間なんてどこにも無かった。そして遂に・・・フィニッシュラインを抜けた。

カメラアオーバースター・・・スラッシャーについてまだ一ヶ月と半月、首都高最速の前に墮ちた。

川「（よし・・・椿ラインは終了か・・・）」

高「（負けた・・・せつかく抜き返したつてのに、その後が駄目じやあな・・・）」

二人とも、やりきつたという表情を見せている。

「まっ、マジかよ・・・『カメラアオーバースター』が負けた・・・」

「あの首都高の走り屋、本当にここまでやっちまったのか・・・」  
ギヤラリー達も騒然としていた。

二人はマシンから降りる。

川「・・・まさかあんな風に抜き返されちまうとはな。俺も多少、油断していた節があったみてえだ。」

高「また抜き返してきたくせに、何を言うか・・・完敗だ。」

高田は笑みを浮かべ、そう言った。

高「あれだけ完璧な走行ライン、ドラテク・・・たった数日走るだけで身につくとは思えねえ・・・増してや、首都高の走り屋がな。」

川「どんなコースだってすぐに順応する、そうじゃねえとやっていけねえからな。WRCとかだつてそうだろ？あまり攻めたことの無いコースを、数日間で見、セッティング、実際に攻めるetc、短期間でどれだけコースに順応できるか、それによってタイムだつて違ってくるはずだ。」

高「そうだな・・・俺もそうなりてえな。」

川「大丈夫さ、あんたならやれる。あれだけのテクを身につけてれば、な。」

高「サンキュー。」

こうして、祐馬は椿ラインを制覇したのであった……。

高「さて、俺は疲れちまったし、明日に備えて早く帰って寝ないと  
な……」

川「ワークスのテストだっけか？万全体制じゃねえとまずいぜ。」

高「ああ。……ところで、お前は次にどこへ行くつもりなんだ？」

川「どこへって……峠か？」

高「ああ。」

はっと思いついた。次の峠もやってやるぜと思っていたが、どこの  
峠に行くかという肝心な事を忘れていた。

川「実のところ、また決めちゃいないんだがな。これから考える。」

高「そうか……頑張ってくれや。」

川「おう。じゃあな。」

高田はエポ10に乗り込み、帰宅。

その直後に祐馬もシルビアに乗って、帰って行った。

川「（最後らしい良いバトルが出来てよかったぜ。あれがラリーで  
培ったテク、か……）」

改めて高田の走りを思い出す。

川「（しかし、次はどこに攻めるかな……それはまた、明日か  
ら調べて行くことにするか。）」  
箱根新道を駆けていった。

自宅にて

幸「よし、いいじゃないか。まずは最初の峠制覇か。」

川「ああ。そこそこ手強い奴だったけど、勝てたから良かったぜ。」

幸「順調で何よりだ。ほんと、お前も強くなつたぜ。どんどん勝っ  
ていけよ。」

川「もちろんさ。そいじゃ俺はこれで寝る。明日から、次に攻める  
峠を調べなくちゃな。」

幸「そうか。」

そうして部屋に行こうとした時・・・

幸「・・・祐馬。」

川「んっ？」

幸之助に呼び止められる。何かと思いきや・・・

幸「・・・あいつも、強くなったな・・・。」

川「あいつ？誰だ？」

幸「・・・夢見の生霊。」

川「夢見の生霊・・・っ！」

幸之助の口から出たのは、十三鬼将四天王の一人・・・新環状のNSXだった。

川「夢見の生霊とバトルしたのか？」

幸「ああ。一番記憶に残ってる奴の一人さ。」

幸之助が一度首都高を離れる前は、何人ものライバルがいた。

その面々は今でも首都高トックラスにいる者ばかりであるが・・・当時の幸之助は、そいつらを確実に負かしていった。

特に白いカリスマと夢見の生霊は何度も彼に挑んでいる。

川「久しぶりのバトルはどうだったんだ？昔はNA1に乗ってたらしいけど、今のNA2と奴のドラテクはどんな感じだ？」

幸「速くなっただけだ・・・俺がいねえ間に、かなり腕を上げている。」

幸「（いつの間にNA2に乗り換えやがったか、夢見の生霊さんよ・・・コーナリングスピードもいい感じじゃないか。）」

2台はレインボーブリッジを疾走する。間もなくC1へ進入・・・

幸「（・・・だが・・・こんなところか。）」

NSXを離していく。

幸「（終わりだな。）」

幸「で、その後PA寄ったら、あっちも止めてきやがった。話を求めてきてな。」

川「夢見の生霊が？」

幸「ああ。久しぶりにやりあったもんだからな、話がしたかったらしい。」

川「話、か・・・」

幸「・・・さて、俺はあいつと久しぶりに話やって疲れたし、そろそろ寝るわ。」

川「おう、おやすみ。」

川「（夢見の生霊か・・・四天王に親父のライバルがいるだなんて、やっぱり親父はすげえや・・・）」  
と、ベッドに入った時だった。

川「（っと、こんな時に来る電話といったら・・・）」  
ピッ

川「とりあえず次に攻める場所は未定です。明日から考えますよつと。」

射「ほうほうそうで・・・って、挨拶くらいさせて下さいよ。今日は大天狗様の用事があったて外の世界にいけなかつたんですから。」

川「って言ってももう随分遅いですよ・・・」

射「そうですね。とりあえず椿ラインの『カメラアオーバースター』撃破という事で、おめでとunggございます。」

川「有り難uggございます。」

射「まあとりあえず取材は明日ぼちぼちするんで、宜しくお願ひします。」

川「ほい。そいじゃ。」  
ピッ

射命丸は取材のためなら深夜でも普通に電話してくる。

川「（さて、そいじゃ寝ますか・・・）」  
就寝。

一方・・・

幸「（あいつ・・・あそこまでの男になるとはな。）」

幸「夢見の生霊・・・君島陽平きみじま しょうへいだっけか、久しぶりだな。」

君「久しぶりだな、首都高を統べる覇者・・・川内幸之助。ちよつと中年だったのがますます親父になつてゐるぜ。」

幸「年取りやあそうなるさ・・・あんたも腕上げたな。NA2にも乗り換えてるしよ。」

君「マシンを換えようが腕を上げようが、普通に打ち破ってきたくせに何を言っただか。」

幸「へっ、そうかもな。」

君「それに、何年もいなかったのに腕が衰えてないんじゃないやあな・・・

・あなたの能力は計り知れないぜ。」

幸「ありがとさんよ。」

談笑しているように見えるが、少し張り詰めている雰囲気だ。

君「・・・今更、何でこの時期に戻ってきたんだ？愛する息子の活躍を見定めるためか？」

幸「あいつが俺の息子だったのを分かつてるのか。」

君「岩崎・・・いや、迅帝から聞いたもんでな。」

幸「迅帝・・・あの若造か。」

君「あいつが丁度来た1週間前にいなくなった・・・一体その時お前に何があつたって言うんだ？俺はまだあの時お前と勝負し足りなかった。館・・・白いカリスマもだ。それなのに何故、お前は・・・」

。問い詰めていく君島。

前作でも少し触れたが、君島は特に幸之助に挑み続けたライバル・・・幸之助はライバルだと思つていたか不明だが。

執念というほどではないが、その70スープラに挑み続け、己の限界を突破しようとした。

そして突然いなくなつたと聞いた時・・・彼はその場で硬直した。それ程の相手だったが故、消えて行った理由を聞きたいのだ。

幸「・・・お前は、まだ知らないみたいだから教えない。」

君「・・・何だそれは・・・何を知らないっていうんだ？」

幸「お前もいつか知るようになるさ。・・・いや、迅帝なら知ってるんじゃないのか？むしろお前が知っていてもおかしくはない。」

君「岩崎が知っている、俺が知っていておかしくない何か・・・だと？その何かが、お前が首都高を一時的に去った理由なのか？」

幸「どうか。・・・とりあえず話は止めた、俺はそろそろ帰る。」

君「・・・そうか・・・分かった。今は止めにしよう。・・・

・最後に言っておく。」

幸「何だ？」

君「これからお前が出てきたら必ずバトルを申し込んでやる。昔みたいにな。」

幸「・・・それだけか。」

君「ああ。・・・じゃあな。」

幸「おう。」

幸之助はスープラに乗り込み、帰っていった。

幸「（・・・まさか・・・本当に知らないのか・・・？・・・まあいいか。早く寝よつと。）」

幸之助も眠りについた。

次の日・・・博麗神社にて

博「あゝ、こんな時にここに集まって何を話そうって言うのよ？」

霧「私まで連れてこさせられるし・・・何か霊夢の勘が火を噴きそうな異変でも起きたのか？」

藍「いいえ。・・・貴方達が外の世界で知り合ったあのシルビアの事に関する話よ。」

博「・・・祐馬の事？」

橙「そつ。」

ここには何人かの走り屋達が集まっている。



霊夢と魔理沙の二人、藍、橙、幽々子と妖夢。

藍、橙は幸之助とだが、それ以外は全員、祐馬と接触した人物である。

本来なら紫も来るはずだったが、冬眠中のため藍と橙で来ている。

西「あの人、フォーエバーナイツからの挑戦状で峠攻めるって言っじゃない。」

魂「それで最初は椿ラインのカメリアオーバースターって言っスラッシャーを、昨日倒したって訳です。」

霧「・・・で、私達が何をするって言っんだ？普通に見守ってるつもりだったんだけどな。」

西「あなた達はそれでいいけど、貴方と霊夢が一番、あのシルビアと接触してるじゃない。だから一応聞いて欲しいことがあるの。」

博「で、その聞いて欲しい事って？」

西「・・・フォーエバーナイツ以外の速い奴がどういう動きを見せるか、って事よ。」

霧「フォーエバーナイツ以外の速い奴？」

藍「要するに『伝説に匹敵する速い奴ら達』・・・例のチームと、プロレーサー2人の事ですよね。」

西「そう。『十二王国』、『アブソルートエンペラー』、『ミラクレスサミット』・・・奴らが目をつけないわけ無いわ。」

橙「それ以外にも、もっと多くの走り屋が興味持つかもしれないしね。」

博「なるほどね・・・でも、あのチームに関してはもう動き出すんじゃないの？それにプロレーサーも。」

西「紫も冬眠から覚めたら、色々見張っているかもしれないわね。そろそろだし。」

博「祐馬の様子を？」

西「ええ。まず十二王国がいつ目を付けるか・・・。」

魂「そういう奴らがいなければ、フォーエバーナイツも、わざわざ色んな峠攻めさせてまでしてから挑むつもりは無かったでしょうし

ね。」

霧「なるほどな。・・・でも、そいつらの様子を気にしてどうするんだよ？」

西「そいつらが出てくることによって・・・隠れている奴らが出てくるのかもしれないのよ。」

霧「隠れている奴ら？誰だよそれ？」

西「それは・・・」

・・・張り詰めていた空気が更に張り詰まる。

博「・・・そいつらが何かやらかすっていつの？」

西「かもしれないわ。」

橙「私達は見たこと無いけど、何でもそのチームは十二王国並み・・・下手したらフォーエバーナイツ並みに速いんだってさ。」

霧「そりゃあ・・・すげえな・・・」

西「それに、幻想郷の走り屋も興味を示して来てる奴がいるみたいだしね。幻想郷最速もそろそろ動くんじゃないかしら。」

博「・・・四季映姫ね。」

その頃・・・

無縁塚には2人の女がいた。

「どうやら、首都高の奴がまた街道に攻め入ってるって話ですよ。」

「知ってるわよ、小町。」

「やはり。」

「でも今回はこの前の変な集団とは違うみたいね。一人らしいじゃない。」

「しかも、博麗の巫女が知り合いになってるとかになってないとか。」

「らしいわね・・・。」

「で、どうするんですか？これからバトルしに出向いてみますか？」

「いや、それはまだよ。もう少し様子を見るわ。」

「そうですね。」

張り詰めた空気のまま話は続く。

この2人もまた、祐馬に目をつけているようだ。

「マシンは何せS15シルビア・・・せめてGT-Rとか私と同じNSXとかの日本車280馬力級なら首都高は十分制せるでしょうけど、シルビアとは・・・」

「何か、凄そうな予感がしますね。」

「そうね・・・とにかく、まだ私達は動かないわよ。」

「了解です。」

そうして斧を持った一人は自分の持ち場へと戻っていった。

「（・・・私がどれだけ対抗できるかしらね・・・）」

同じ頃・・・とある山道の駐車場にて

「・・・どうやら、首都高の奴が、神奈川の椿ラインって所に攻め入ったらしいじゃないか。」

「ああ、もちろん聞いたぜ。まさかまた首都高の奴とはな。」

そこには、二台のマシンが停まっている。

一台は白いクリオ・ルノー・スポール V6 Ph2。もう一台は、フォグランプを前面につけた黒いGDB初期インプレッサ。

どちらも相当のチューニングが施してあるのが、その雰囲気から伺える。

そしてその持ち主の二人は・・・

「今度は数年前攻めてきた十三鬼将のトップ・・・迅帝をも凌ぐ奴らしいぞ。」

「何っ・・・それは初耳だな。マシンは？俺は聞いてないんだが。」

「残念だけど俺もだ。でも迅帝よりも腕があると成れば・・・」

「・・・その時点で、俺らがどうなるかは分かっちゃまっていることか。」

「そうとは言いたくないがな・・・。だが心配はいらない。十分の俺らを楽しませてくれるだろう。まずは・・・スラッシャー共がどうなるかだ。」

「まあ、そもそも峠の実力もどうか分からないしな。」

「ああ。」

「俺らだつてやることはやって見せようじゃねえか。だが、まだ様子見だな。」

「そうだな。いつかは、奴が攻めているところを見学するでしょう。」

そう話している二人に、さあつと風が吹いていった。

この二人もまた、街道界における重要な人物の二人・・・

「・・・しかし、こうやって俺らが話しているってことは、あいつらも目をつけてない筈が無いよな。」

「だな・・・“十二王国”・・・」

「そいつらも仕掛けるとなれば・・・街道界はまた色々騒がれるかもしれないねえ。」

「そうかもな・・・んっ・・・？」

と、そこへ一台のマシンが入ってくる。

「・・・奴、か・・・」

「ああ・・・」

白いNSX、NA2・・・ドライバーは・・・

「・・・こんなところで何をしてるんだ。スーパーGTの今後の展開でも語り合ってたのか？」

プロレース界における伝説・・・渡利洋。

「お前こそ何しに来たんだ？偶然、とか言っんじゃねえぞ。」

渡「残念だけどその偶然さ。街道に歴史を刻んだあんたら二人が話してるのを見て、気にならないわけが無いだろ。」

「そうだろうがな・・・伝説のレーサー、そして文々。新聞カーレビューアーさんよ。」

この二人と渡はプロレース界で上位を争い続けた良きライバル。

お互い、それぞれ何をしているかを知っている。

渡「それで・・・随分と重要な話をしてるみたいだな。」

「まあな・・・だが、あんたには関係ない。」

渡「この時期に来て引退を考えてるとでも？スーパーGTもFポン

ももうすぐ開幕つてのに。」

「それは違うんだがな。」

渡「だとすれば・・・『シルバーナイトシャイン』の事か。」

「お見通しか・・・お前も知っていたとはな。」

既に祐馬が街道に出ていることは、渡の耳にも届いていたようだ。

渡「そりゃそうさ。あいつも、気になつてたからな。俺も峠を走つてたし。」

「そうか。」

「お前も一度やりあいたいんじゃないか？そいつと。」

渡「・・・さあ、どうかな。」

「・・・否定も肯定も無しか・・・気になつてるってことは、結局バトルするんだろ？」

渡「まあ確かにそうかもな。サーキットの実力じゃなく、峠の実力も間近で見たいものだ。」

「・・・は？」

・・・一瞬、二人は固まった。

渡「・・・まあ、話はそれだけにしとくか。じっくりそいつの事を話しててくれ。」

「あつ、ああ・・・」

渡は去つていった。

「・・・なんなんだ、あいつ・・・？サーキットの実力じゃなくつて・・・」

「・・・まさかな・・・あいつ、『シルバーナイトシャイン』とやつたつてののか？」

「・・・さあな・・・」

こうして街道界は一気にざわついた。  
首都高から来る新たな侵略者・・・そう思う者も少なからずいただ  
ろう。

しかしスラッシャー達はそうは思っていなかった。高田と大字が話  
をしたおかげだろう。

これから街道はどうなっていくか・・・かつて十三鬼将に攻め込ま  
れた峠の走り屋は、いつ祐馬がやってくるのか気になっていた。

果たして、いつフォーエバーナイトと戦うことになるのやら・・・

その頃、祐馬は厚井と共に整備場にいた。

厚「スラッシャー遂に撃破か。これでフォーエバーナイトとのバト  
ルが近づいたって訳だな。」

川「ああ。今日からは次の峠について考えようと思う。」

厚「そうか。同じ神奈川ならまだ峠はあるはずだけだな。聞いた所  
によれば、賑わっている峠は結構あるけど、スラッシャーとか言う  
ボスの存在がいるのは少ないらしい。」

川「へえ・・・まあ、スラッシャーはいてもいなくてもいいけど。  
どうすつかな・・・」

厚「じっくり調べたほうがいいかもな。」

川「そうだな。」

次はどこへ攻めるか・・・そこそこ重要な課題である。

川「さて・・・今夜は首都高だな。」

厚「夜中攻めるのも数日ぶりか。思いつきり攻めるよ。」

川「分かってるさ。俺は最速の男、抜かりは無いぜ。」

夜、23:11・・・

川「さて・・・んおつ、親父も一緒に行くのか？」

幸「出る時間が重なっただけだ。」

川「そうか・・・そっいや、最近親父は首都高攻めてるわけだけ  
ど、親父のスーブラ見て何か妙な反応示す奴とかはいないのか？」

幸「いや、そんなのはいねえ。いるとしても、昨日の夜話した十三鬼将の連中とか、いつだかにバトルしたいろは坂の女くらいだろ。」  
川「そうなのか・・・」

幸「今となつては俺もその程度つて事だろ。あくまで知名度としては、だけどな。」

川「でもテクはずば抜けているもんな・・・きつとまた、親父の名が知れ渡るだろうよ。もうそうなつてもおかしくない時期だろ？」

幸「そうかもしれないねえな。さて、話はここまでにして行こうぜ。」

川「OK。」

二人はマシンに乗り込み、首都高へと向かった。途中でそれぞれ別れて、別々のICへ向かう。

川「（しかし最近は帰りにちょっと攻めるくらいで殆どバトルしてなかったもんな・・・誰が挑んでくるかな）」

首都高へと入っていく。

数十分後・・・

川「（よゝし、これで5勝目つ、いい調子だ。）」

着々と勝ち星を積み重ねていく祐馬。湾岸線のかつ飛ばしから始まり、横羽を通つて現在C1に至っている。

川「（さて、一旦休憩しますかね・・・ここだな。）」

一度PAに入っていく。

川「（・・・ん？・・・八チロク集団・・・？）」

PAに入ると、そこにはずらりと並んだ八チロク達が出た。

休憩つただけでPAに入ったので少し驚いた祐馬。

しかし・・・

川「（おかしいな・・・）」

祐馬はふと疑問に思った。

川「（・・・集団が2つ・・・どういう事だ？）」

首都高を攻める八チロク集団といえば2つ、C1の「Rolling Guy」と新環状の「R.Ganggs」。

祐馬が見る限り、そのチームエンブレムからして、一方の集団はRollong Guyだと言える。マシンも、祐馬の記憶と一致していた。

しかしもう一方のエンブレムは全く見覚えが無い。少なくともR Gangsでは無い。

川「（俺がよく見てないうちに、そういうチームが増えたって事かな・・・）」

とりあえず少し離れたところに停め、様子を伺う事にしたのだが・

川「（・・・おつ、こつという時にいい人発見。）」

・・・祐馬の視線の先にいるのは、紛れも無く射命丸。

というわけで早速聞き込み・・・と思つたら、あちらから近づいてきた。

川「（やつぱりあつちは気づいてたか・・・）」

射「おつ、どうも、『シルバーナイトシャイン』川内祐馬さん。どうやらその様子だと、何も知らずにここに入ってきたようで。」

川「いやまあ、ハチロクがすげー並んでるから何事なのかと。ただ休憩で入ってきただけなんですけどね。」

射「となると、あの新参ハチロク集団も知りませんか？」

川「正解です。」

やはり射命丸は知っている模様だ。

射「あの集団は最近現れたんですけどねえ、いきなり首都高でチームを立ち上げて、同じハチロク集団って事でバトルまで仕掛けてこなってるんです。」

川「へえ・・・そのチーム名は？」

射「『Rolling Girl』ですよ。」

川「・・・は？」

思わず耳を疑った。

ガール・・・女？女のハチロク集団？

射「まあとりあえず、あれ見て下さいよ。」



川「んむ・・・」

射命丸の指差す先を見ると、八チロクの前にいる女が5人いた。

射「女だから単純にガールらしいですけどね。」

川「そのまんまかよ・・・」

射「メンバー達の通り名もそのまんま、『ローリング娘 号』だと。

」

川「普通にそれパクリだよな・・・」

射「とはいえ、どうしてそんなチームが立ったのかはちゃんと理由があるみたいですけどね。」

川「知ってるのか？」

射「ええ。既に聞き込み済み。」

相変わらず情報収集が早い。

射「元々サーキットで攻めてたチームだったらしいんですけど、なんか偉そうな走り屋に『八チロクなんぞで攻めるなんて時代遅れにも程があるわ!』と言われたらしいです。」

川「そういう奴もいるもんだな・・・で、その煽りにどう対抗したと？」

射「その後のアタックで勝利したらしいです。僅差という話ですけど。」

川「なら良かったじゃないか。・・・で、そこからどう首都高を攻めることに繋がるんだ？」

射「どうやらその走り屋が首都高に出たての走り屋だったらしくて、首都高を攻めてるって聞いた瞬間、そこ攻めてみようかって話になっただけです。」

川「それだけでかよ・・・そいで、チーム名がパクリみたいな理由は？」

射「そこまでは私も分かりませんね。」

川「そうか・・・」

射「・・・おっ、戻ってきましたね。」

PAに二台の八チロクが入ってくる。

見る限りだと、Guyが前でGirlが後ろとなっている。

あまり差は無かったので、そこそこ熱いバトルだったんだろっか。それを見ていた両チームのメンバーは、Girlは悔しがり、Guyは少し笑みを浮かべて頷いた。

川「あれ？もうバトルって始まってた？」

射「ええ、これで終わりですよ。」

川「そうだったのか・・・」

射「・・・どうやら最後のリーダー戦も、Rolling Guyの勝ちみたいですわ。」

川「本当だな・・・」

その後二台からドライバーが降りてきて、リーダー同士で話をしていた。

射「これで6戦全てRolling Guyの完全勝利、ですか・

・

川「それ駄目じゃねーかよおい。」

射「・・・ああ、でもでも、このリーダー戦以外は皆僅差だったの  
で、同等の実力を持つてるのは確かでしょう。まあまだあのチームも来たてですから、あのベテラン達にバトルを仕掛けるのは早すぎたって事でしょう。」

川「それでも同等の実力か・・・今後、C1のチームを薙ぎ倒していくのかな・・・せいじゃ、俺はもう十分PAにいるし、そろそろ行きますわ。」

射「ほいほい。」

祐馬はシルビアに乗り込んだ。

射「(さ)て私はあの2チームの様子を・・・あれ？」

気づいたときには、Rolling Girlは全員、マシンに乗り込んで退散していた。

射「(話終わるのが案外早いんだな・・・ローリング野郎達もいきますね・・・)」

Rolling Guyも全員、マシンに乗り込んだ。

射「（にしても・・・まさか、川内祐馬にバトルを挑もうとか言う馬鹿な真似をするつもりじゃあ・・・）」

射「（まっ、正体を知っていなきゃ馬鹿も何も無いか・・・さてと、今日はそろそろ戻らないといけないわね。少し雨の中を攻めてから戻るか。）」

射命丸もまた、マシンに乗り込み、PAを後にした。それは、段々雨音が辺りに響いてきた頃だった。

その頃・・・

川「（今日の深夜からは強い雨が降り出すでしょう・・・当たりだな。あのハチロクのバトル、雨が降る前に終わって良かったじゃないか。）」

祐馬は天気予報で雨は予測していた。ただマシンは専用セッティングではないが。

川「（にしてもいねえな・・・走り屋っぽいのが一台もいやしねえ。）」

そう思っていた、その時だった。

川「（・・・ん・・・さっきのハチロク集団・・・あのエンブレムはガールの方か。）」

先ほどPAにいたRolling Girlの6台が祐馬シルビアの横を過ぎていく。

ただそれだけに見えたのだが・・・その後である。

川「（・・・ちよつと待て、ハザードだと・・・?）」

一番後ろのハチロクが、シルビアを追い抜いた後に減速しハザードランプを点滅させる。

そしてその前のハチロク達も、ハザードは点滅していないが、同様に減速する。

川「（こりゃあ新しいパターンというか・・・ローリング野郎達の後に俺を6台で襲うことはねえだろ・・・?）」

まさかの6VS1、そう判断した。

とりあえずパッシングしておく祐馬。

川「(受けないわけにはいかねえけども・・・こんな大勢を一気に相手にするのは初めてだぞ？そもそも6人相手なんてした奴が今までののか？オフィシャルレースじゃあるまいし・・・)」

こんな大勢で仕掛けてくる相手なんて聞いたことが無かった。

彼女達もそういうバトルを仕掛けるようなチームじゃない筈なのだが・・・一体何を考えているのか。

そして、江戸橋JCTを過ぎた所でバトルは始まった。

川「(大人数バトル、ぜひとも勝ってみせようじゃねえか・・・！)」

水飛沫を軽く上げて、ハチロク達は加速していく。

シルビアも同様に加速。速攻でハチロクに迫っていく。

川「(・・・首都高攻めるには、ハチロクとしては十分なもんか・・・だが、性能差があるマシンの前ではこの程度・・・それをどうやってカバーしてくるか・・・)」

目の前にいるレビンをパスしようとする。

川「(・・・予想通り。)」  
前にいたトレノが後退し、レビンがシルビアに抜かされないようブロックに回る。

しかしブロックは本当に抜かされないためのもとなってしまうていた。既にS15はレビンと並走状態にある。

川「(こう来るとは思ったが・・・)」

次のコーナー。前の二台のブレーキングに合わせた後、減速を控えめにする。

川「(突破口を最低限に抑えることは不可能なのか?)」

JCTでアウト側から一気に2台を抜いていく。  
前にいたレビンはすかさずブロックに回った。

川「(このまま前のペースに合わせてたら、後ろの2台が俺を抜き返すチャンスが出来ちまう・・・早めにパスしたいところだが・・・)」

）  
更に前にいるトレノはレビンの援護には回っていない。

川「（・・・このまま遠慮なく行くぜ!）」

次の左コーナーまでにレビンと並び、コーナーでパス。  
立ち上がりの勢いでトレノに迫っていく。

路面も十分に濡れてきた中、シルビアはアクセルワークで空転を抑え込み、変わらないペースで駆け抜けていく。

川「（まだまだ、後3台・・・!）」

既に次の相手を抜く準備は出来ている。

煽る程も無く、アクセルを緩めて様子を伺う。

相手のトレノの方もブロックで必死だった。

川「（・・・後2台!）」

霞ヶ関トンネル前、左コーナーでインからパス。

残るは2号と1号のみ。2号は捉えている。

川「（遠慮なくいかせてもらうぜ・・・残り1台・・・!!!）」

緩い左の後の右コーナーにて、またもインからパスしていった。

久しぶりに思い切って攻める首都高で、6VS1のバトルを切り抜けていく。

そして残るは1台。ここまでの道のりは全く困難ではなかった。

言ってしまうえば余裕である。

そして1号は・・・

川「（・・・!）」

2号をパスしてコーナーを抜けた後、祐馬の表情が数秒間、固まった。

1号は目の前・・・いや、次のコーナーにさえもいなかった。

川「（・・・そういうことなのかよ・・・!!!）」

余裕をかまして走行しているわけではなかった。今までの5台のハチロク、ブロックされつつもかなり速いペースで抜かしていった。

その間に1号は一気に引き離して行ったのである。

川「(ここまで順調にパスしても亀程度か・・・八チロクにブロックされてるあの短時間さえも無駄だったなら、すぐにそれを取り返してみせる!)」

一刻の猶予も許されていないだろう事態を察知した祐馬は足に力を込め、1号を追いかけていく。

しかしブロックしてる最中に引き離して行ったとはいえ八チロクにしては凄まじい速さ・・・フルチューンしてもここまで引き離されないだろうとなると、あの1号も相当速いエンジンに換装済みのようだ。

フライングされた可能性もあるが、祐馬はそれは無いと考えていた。スタート時、1号から6号まで規則正しく並んでスタートしていたからだ。

川「(ここまでとなると、ローリング野郎1号と同じくらいのエンジンじゃねえのか・・・?)」  
イン側にいる一般車達を、アウト側でケツが暴れるのを抑えながら抜き去っていく。

200km/h以上を維持し、疾走する。

間も無くトンネルを抜ける。2号はもうバックミラーから見えかけている頃だった。

川「(赤坂ストレートか・・・ここで見えてほしいもんだけどな・・・)」

トンネルを出る・・・

川「(・・・よっしゃ、捉えた!!)」

少し先にいる八チロクを発見した。あまり差は無い。

多少スピードが出ているみたいだったので、間違いなくローリング娘1号だろう。

川「(離れたところから一気に近づかれたからって怯えるんじゃないぞ・・・このまま一気にケリをつける!)」

一般車は大した数ではない。十分な加速は可能だった。

230から300・・・そこまで加速するのは軽いものだった。  
1号との差は瞬く間に縮まっていく。

川「・・・よし、追いついた・・・！」  
最後の1台・・・このまま抜けるか。

このまま抜き去れば、1号の後ろにつくのに時間がかかった程度で  
そう苦戦はない事になる。

しかし・・・知らない間に自分を置き去りに仕掛けたマシンを、そ  
う簡単に抜かせるわけが無かった。

川「・・・完全にラインに被せてくるってのか・・・？」  
200km/h程で前を塞ぐ八チロク。

シルビアは減速して対処、そこから加速で抜き返そうと試みる。

川「(その程度なら痒くもねえ、終わりにする!)」

丁度その時、左コーナーが迫った。

川「(・・・つとお・・・!?)」

八チロクは抜かれる寸前、一気に左にケツを振り、フロントをシル  
ビアのラインに被せてきた。

きつめの角度でドリフトしながら、コーナーを抜けていく。

川「(ここでそんな風に対処されっとはな。角度からして一気にス  
ピンするかと思ったが・・・くっ、立ち上がりでもパスは無理か・・・)

片側にトラックが一台。八チロクのケツに張り付いたまま、次のコ  
ーナーへ。

川「(そろそろ芝公園か・・・これでもC1半周したんだな・・・こ  
こで手こずるわけにはいかねえ、そろそろ終わりにしねえと・・・  
!)」

祐馬の目は常に抜きどころを伺っている。

速度はさほど出ていない。差も全く無い。

このまま抜き返すか・・・間も無く芝公園の連続コーナーが迫って  
いた。

そして・・・仕掛ける。

川「（コーナーのブロックは流石だと思ったが・・・ここでそんな簡単に隙間作ってちゃあ駄目だぜ・・・!）」

左の車線に入り込む。そのまま加速でズバーンとパスした。

川「（このコーナリングで一気に仕留める!）」

ブレーキングドリフトで芝公園のコーナーを駆け抜けていく。200km/h近くを維持しながら曲がっていくシルビアに、八チロクはついていけない。

更にコーナーを抜けた後の加速・・・八チロクも高いパワーによる立ち上がりを見せていたが、シルビアには及ばなかった。

川「（これで終わりだ・・・!）」

浜崎橋JCTでC1方面に進入。

一般車もない良好な環境の中で高速ドリフト。200km/hオーバーで一気に曲がって行ったシルビアは、八チロクに止めを刺した。

そして、その後も走り続けていく。

川「（・・・もう見えなくなってから随分経つか・・・終わったな。）」

6VS1・・・首都高で誰も経験した事ないだろう大人数相手のバトルは、こうして幕を閉じた。

その後、自宅にて・・・

幸「八チロク軍団との6VS1い？なんじゃそりゃ？」

川「PAで溜まってるところを見てて、その後出て行った俺を追っかけて、全員で挑んできたんだと思う。」

幸「つつても、6VS1なんて聞いたこともねえぜ？そんな奇襲かけてくるやつがいるのかよ？」

川「実際、ああいうバトルを仕掛けてくるチームはいないだろうな。普段どうい活動しているかは知らないけど。」

幸「ふ〜ん・・・珍しいのがあるもんだ・・・。昔でも、そんな奴いなかったのにな。」



川「だろうな。俺も今までに、そういう前例は聞いた事が無い。あ  
あいうバトルを仕掛けてきたのにも、何か理由があるんだろう。」

幸「そうなのか。・・・さて・・・俺はそろそろ寝るわ。」

川「おう、おやすみさん。」

祐馬も自分の部屋へと向かった。

**T h e 1 s t P a s s . (後書き)**

次回は普通に次の峠へ・・・

まだまだフォーエバーナイツとのバトルは先のようにです。

## High Technical (前書き)

第三章です。超遅筆なので最初のバトルだけでも上げておきます。  
後日完成後、再び上げます。

## High Technical

次の日の朝・・・

川「おはよー、親父・・・ん？」

朝起きていつも通り1階で親父と会うはずが、いない。

川「(朝からどこ行ったんだか・・・)」

玄関に靴が無いのと、外にスープラが停まっていないうを確認する。

川「(まつ、俺も今日はちよいと出かけなくちゃな。)」

朝飯を済ませて外に出て、シルビアに乗り込む。

何故かという・・・次に定めた“ターゲット”に行くのである。

昨日の夜にネットで調べた結果、中々の有名どころを発見、そこに行つて見ることにしたのである。

前回と同じく神奈川県内・・・いや、静岡と言つべきか。ひたすらコーナーが続く難コース・・・

祐馬は目的地へと向かった。

AM11:21

川「(今日の渋滞は散々だったな・・・何時間停まっていた事やら・・・さて、そろそろ箱根だな。)」

まだ長尾までは距離があるが高速は既に降りており、途中で箱根の峠に寄つた。

川「・・・ん・・・(あれは・・・)」

走り屋はいないかと思つたら、FTOが一台停まっている。  
箱根スラッシャーのMMC大字だった。

あちらも祐馬のシルビアに気づいたらしく、こちらに振り向く。

大「どうしたつてんだ、この昼間にわざわざ・・・」

川「いやまあ・・・ちよつくら寄り道したら、スラッシャーのあんたがいたもんだからな。」

大「ほう……椿ラインに行くのか？」

川「いや……次に攻める峠だ。」

大「次？……」

「……峠の名前を聞いた瞬間、大字は納得した表情……を見せる  
と思いきや、少ししかめた表情も見せた。」

大「あそこが結構ハイレベルってのは知ってるのか？」

川「峠そのものはハイレベルってのは噂で十分聞いてるけども、ど  
ういった走り屋がいるかまでは調べてない。」

大「そうか……となると、あそこは県内はもちろん、静岡県内で  
もトップクラスだつてのは……」

川「いや、それは知っている。」

大「それくらいも知ってるか……だとすればあんたが攻めるに  
は十分な場所だろうな。まあでも、要注意すべき人物は一人いる。」

川「要注意？」

大「スラッシャーの久方大吾……人呼んで『旋律追いかけし者』。  
」

川「久方大吾……？」

スラッシャーが要注意人物……その峠の主格を担う実力者だから  
要注意というのもおかしくはないが。

何か意味深なようにも聞こえる。

大「ブルーのRX-8乗りなんだが……甘く見るな、NAのまま  
でも嘘みたいに速い。」

川「そこまで言うくらいなのか。」

大「ああ。」

川「……分かった、俺もこの目でまずはその速さを確かめる必要  
があるな。」

大「それが一番だな。」

こう聞いたからには相当速いのだろう。あのハイレベルな長尾をR  
X-8で攻めるスラッシャー……

どんなもんなのかと期待が高まっていた。

・・・と、ここで大字が話を変える。

大「・・・ところで・・・お前は実際、幽々子の腕をどう思った？」  
川「幽々子の？」

西行寺幽々子の腕・・・最近バトルしたわけじゃないのでうる覚えだが、初見では率直に「凄い」、と思っていた祐馬。

川「まあ・・・チェイサーにしちゃあかなり攻め切れていると思った。あんなんでこの峠攻められるんだから、すげえと思ったよ。」

大「そうか・・・俺もまだまだ、FTOじゃ敵わねえかな・・・」  
川「・・・バトルしたことはあるのか？」

大「当然だ。箱根スラッシャーを長年名乗り続けている以上、そういう奴が現れるからには放っておけないってもんだろ。」

川「で、どうだったんだ？」  
大「最初っから最後まで詰め寄ったが・・・前に出ることは一度もなかった。」

川「・・・負けちまったのか。」  
悔しげな表情を見せかけた大字。

大「でも、純粹に奴は凄いと思った。チェイサーは峠じゃそこそこ大柄な類に入るけど、あそこまで軽快に走っている奴は初めてだったからな。」

川「そうだな、俺も確かに、奴のは予想以上のハンドリング捌きだったと思う。」

大「だよな・・・。幻想郷出身は、女ばかりでも相当なテクを持っている話だとは聞いていたが、あそこまでは・・・。」

川「でもあんたも凄いと思うぜ。FTOでハイパワーなチェイサーについていけるとは、相当戦闘力を上げてるみたいだな。」

大「ああ。こいつとも、長い付き合いだからな。今までずっと研究に研究を重ねここまでレベルアップさせてきたんだ。そして俺の腕と合わさってそれは結晶になる・・・だけ、あのチェイサーと幽々子の腕には敵わなかった。」

川「いやでも、あれだけハイパワーマシンについていけるだなんて

な・・・あなたの腕も相当なもんだろ。」

大「ここで何年攻めてると思ってるんだ？それだけ攻めて、スラッシュの座についてるんだからな。」

川「そうだな。」

大「・・・さて、俺はそろそろ行くかな。せいじゃ、健闘を祈る。」

川「サンキュー。じゃあな。」

二人はその場を後にした。

大「（西行寺幽々子・・・またお手合わせ願いたいところだが・・・だが、その前に俺はこの相棒に更なる強化を施さなきゃ・・・腕も磨かねえと・・・）」

峠を軽く走るシルビア。

もう後2、3ヶ月すれば、木に桜の蕾が実り始める・・・そんな気配を感じさせてくれていた。

川「（春に走れば満開の桜か・・・こりゃあ、攻めるの忘れて見とれちまいそうだな）」

そのまま軽く流していく。

一般車は思ったよりも大分少ない。

川「（昼からこんなに少ないと夜はガラガラだよな・・・俺らにとっちゃ走りやすいけども。首都高だと、常に一般車がいるからな）」

その峠へと向かっていく。

静岡県某所・・・

川「ここ、だな。」

シルビアを止め、一度辺りを見渡す。

ここは長尾峠・・・関東でも有数の難所である。

ドライバーの腕を殆ど休ませる事無く続くコーナーはとにかくきつく、また若干オーバーテイクも厳しい。

神奈川と静岡を跨ぐ峠ではあるが、主に走り屋達がコースとして使

用しているのは静岡県側となる。

こんなところを祐馬は選んでしまった。しかし本人には楽しみしかない。

川「（まずはさーつと下見しますかね・・・）」  
早速、峠へと進入する。

・・・下りの中盤に差し掛かるところ・・・

川「・・・うむ・・・」（ここまで連続してコーナーが続くか・・・今夜は往復くらいはするけど、このくらいなら焦るほどでもないな。）

「  
手ごたえを感じた祐馬。

川「（まだゴールでは無さそうだな。・・・ん、ありや地元の走り屋か・・・？）」

路肩に止めてある一台の青いN Aロードスター。すぐそこにはその持ち主と思われる走り屋と、その友人と思われる人物がいる。

川「（この昼間から走り屋のマシンと出くわすとは思わなかったな。まあ気にせず行きますか。もしも夜に会ったら何か話しかけられるかな。）」

普通にスルーしておく。

一方・・・

男1「・・・見ましたか？今のS15・・・」

男2「ああ・・・思わず俺も震えちゃった。銀色のボディにあのエアロは・・・間違いなく『シルバーナイトシャイン』か・・・」

2人は既にシルバーナイトシャインについてある程度知っているようだ。

男2「まさか兄貴の言うとおりだな・・・腕を磨いて備えておいて正解ってわけか。」

男1「でも時間を稼いだほうがいいんじゃないですかね？一度この峠でどれだけの実力を見せるか・・・前の椿ラインのスラッシャーも同様の事をしていたと聞きました。」



男2「ラリーストの奴だっけ？高田って言ってたな。でも・・・うちの峠の輩は並の奴らばかりじゃないが、椿ラインでの噂を聞く限りでは・・・皆にわざわざ苦渋を飲ませるくらいならなるべく早めに手を打つつもりだ。まあ俺の腕もそこまで完璧ってわけでもないけども・・・少なくとも、5日以内には出よう。」

男1「そうっすか・・・。やっぱ俺も、久方さんの出る前に出たほうがいいですかね・・・。」

男2「お前の腕を見れば十分対抗馬にもなれるだろう。ロードスターでも非力じゃないからな。」

男1「それじゃ、僕もいつもより多めにアタックします。」

男2「OK。」

シルビアは既に終盤まで到達、間も無く下り終える。

川「・・・軽く走ってみただけど、攻め応えはありそうだ。ひつきりなしにコーナーがやってくる区間もあるし・・・今夜は一回くらい攻めて往復したほうが良さそうかもな。」

下りゴールを過ぎて、駐車場を発見し、一息ついた。

川「(一度親父に電話しとくか・・・あっちも何やってるか気になるしな。)」

携帯を取り出し、電話をかける。

川「・・・もしもし？」

幸「おう、今ちよいと忙しいもんでな、朝っぱらから家出てる。」

川「何やってるんだ？乗り回す事以外で朝からいないだなんて、珍しいじゃん。」

幸「まあ、それは後で分かるさ。」

川「後で分かる？」

幸「ああ。」

少し気になった祐馬だったが、・・・それよりも、お前は？」

川「ああそうだった。俺も今日は1日いない。ちょっくら次の峠に来てるもんで。」

幸「次の峠え？」

川「静岡と神奈川を跨ぐ長尾って峠だ。」

幸「ふ〜ん・・・まつ、頑張れや。今夜は帰ってくるだろ？」

川「かつ飛ばせば深夜でも帰ってこれるはずだ。」

幸「分かった。」

電話を切って、そこにあつた店で一服した。

夜・・・

川「（ふ〜つ、初めての静岡観光だったな。富士に行くときは観光しようと思っていなかったからな。夜までの暇つぶしにはなったぜ。」

そうして、長尾へと向かう。

駐車場付近にて・・・

川「（今日はそこそこ集まってるのか。数台、それっぽいマシンはいるな。）」

祐馬が見る限りでは、8台ほど溜まっているのが確認できた。

残念ながら、青いRX-8というのはいなかったが。

再び祐馬は前を向き、気を引き締める。今夜はまずアタックを優先し、コースをなるべく覚えていく事にした。

川「（そいじゃ・・・行きますかね。）」

駐車を過ぎた瞬間、アクセルを一気に踏み込んだ。

まずはヒルクライム・・・最初のアタックのスタートである。

川「（軽くギアは低めに設定したからな、立ち上がりのトルクくらいは十分に確保できるか・・・!）」

ケツを振り過ぎないように、慎重なアクセルワークとハンドリングで、安定したラインで抜けていく。

攻めるのが初めて、とは到底思えないだろう。

川「（ここでヘアピン・・・っ!）」

サイドを一気に引いて、フロントを軸に急旋回していく。

川「(まだまだだ、ここまでは順調だが、もうちょい攻められるか・  
・!?!?・・・つと・・・ここで反対車線から来るか・・・)」

前方からのライトを確認する。予め減速するが、このままだとコーナーですれ違いになる。

左によつていく。次は左コーナー・・・こちらがイン側となるだろう。

コーナーに進入、すれ違う。  
相手は2台だったが・・・そのマシンを見て、祐馬は少しばかり驚いた。

川「(・・・つ・・・今の奴・・・まさか・・・)」

マシンは青のロードスター・・・昼にも見かけた奴だった。

そしてもう1台・・・同じく青のRX-8。

川「(スラッシャーは青のRX-8つつたつたけな・・・だとすればあいつか・・・!あのロードスターは昼にも見たけど、連れなのか、はたまたバトルしてるだけか・・・)」

そうこう考えながら、コーナーを抜けて、再び右足に力を入れる。

一気にスピードを出していき、コーナーで一気に減速していく・・・

「(あいつ・・・やはり来たか・・・今晚からは色々騒がしくなるぞ・・・)」

川「(ふう、これでアタック終了・・・3分半くらいは行ったか・  
・初めてだからこんなもんだな。最速はどれくらいのタイムを出すかが肝だな。)」

ひとまず駐車場内へ。

川「(ここもそこそこいるんだな・・・休憩してる間にバトルの申し込みがあれば受けるしかない・・・と思つたら・・・)」

10台ほどマシンがいるのだが、その中の1台、赤いランエボ6乗りの走り屋が、早速祐馬のもとへやってきた。

川「(こりゃあ、いきなりか・・・)」

男は祐馬に話しかける。

「おいあんた・・・まさかとは思うけど、この前、椿ラインの『カメリアオーバースター』を倒したって奴・・・だな？」

川「そうだ。俺とバトルしたいのか？」

「・・・やる気満々じゃねえか。この長尾もよ。」

川「って言っても、まだ今日が初めてだけだな。」

「へっ、それでも受けて立つのが道理つてもんだろ？」

川「ああ。お前さんも、中々やる気満々じゃないか。」

「そうだ。俺は首都高の奴が来たときは、絶対に俺が最初に出てやるうと決めてたからな。」

実際、男の表情は不敵の笑みを浮かばせていた。敵対心はむき出しというわけではなさそうだ。

「俺は岡海恭治おかづみ きょうじ・・・あのランエポ6に乗ってる。」

川「俺は川内祐馬、知つての通りこのS15が相棒だ。」

岡「そいじゃ、早速バトルと行こうぜ。このコースのレベルを思い知れ・・・！」

川「ああ、思い知る前に突き放してやるさ！」

二人はマシンに乗り込んだ。

ギャラリー1「相変わらず岡海さん、挑発的というか・・・まあマイルドだけだな・・・」

ギャラリー2「それなりに楽しみにしてたんだろ。あの十三鬼将・・・ってのとは違って、悪気があるわけではないらしいな。」

ギャラリー1「でも、あくまでこの峠を制するつもりで来てるんだぜ？」

ギャラリー2「そうなんだけどな・・・どういうわけだか・・・」

左手でハンドルを、右手でシフトレバーを握り締め、一呼吸する祐馬。

このランエポ6が、長尾第一戦の相手となる。

川「よし・・・まだそんなに走っちゃあいねえけど、勝てる自信

は無いわけじゃない。だけど、接戦にはなるかもな・・・負けることも普通にありえるけど、あまり考えないほうがいいな。行くぜ。」

前を向き、集中。

岡「（あのシルビアから感じるオーラ・・・あいつがマシンに乗った途端、一気に放出されてるといっつか・・・なんだ、この凄まじい気迫・・・!?!?）」

相手もハンドルを握り締めるが、祐馬がマシンに乗り込んだ瞬間から、その強大なオーラを感じ取り、体が若干恐怖を覚えていた。

しかし・・・

岡「（まあそれはそれで・・・がっかりさせられることはないな・・・!?!さあ、ダウンヒルに行こうじゃねえか、長尾での初黒星を早速つけて見せるぜ!!）」

不敵の笑みを浮かべながら、前を向く。

「それじゃあカウント行くぞ!!!!5、4、3、2、1、スタートオ!!!!!!」

エンジンが一気に唸りを上げる。

長尾でのバトルが、遂に始まった。

川「（控えめに行きはしねえぜ、前に出れるかっ!?!?)」

岡「（どうだ、スタートは上手く行った!!!!）」

二台のスタートは・・・

川「（貰った!）」

岡「くっ・・・!（首都高を走るだけはあるな、そのエンジンは・・・!）」

シルビアが前に出た。

岡「（だが焦る必要は無いぜ、まだレースは始まったばかりだ!!!!）」

1コーナー、2コーナー・・・僅差で走りぬけていく。

川「（そろそろここで・・・っ・・・!!!!）」

軽くサイドを引いてケツを微妙に振っていく。

その時・・・

パパァン！！！！

川「(なっ、なんだなんだ・・・)」

妙な音がしたとは思ったが、すぐに祐馬は気づいた。

川「(そっか、どっかででかい花火でもしてんのかと思ったら・・・

・ミスファイアリングシステムね・・・)」

ミスファイアリングシステム・・・簡単に言えば、ターボラグを無くし、加速を良くしてくれるシステム。

ラリーマシンに装着されている場合が多く、市販されているマシンにも搭載されている場合があるが、多くは作動しないように設定されている。

ランエボもその一台だ。

岡海は、システムを作動させるように設定したのだ。

ただし、作動させるとマフラーからはちよつとうるさい音が聞こえるようになるが・・・。

川「(それがあんたの速さの秘訣の1つになるのか・・・だが、俺を相手にして、それが功を奏す事は無いぜ・・・！！)」

「(ちつとうるせえかもしれないが、俺はミスファイアリングシステムを解放したお陰でコーナーの立ち上がりは大分良くなった・・・

！うるせえ事に気い取られてたら、容赦なく抜いてやる・・・！)」

二台はコーナーを抜け、加速。その後もハンドルを動かす事は絶えず、精神力と体力がじりじりと削られていく。

とはいえ、まだ祐馬にはどうってことはない。当然、相手の岡海もだ。

川「(まだ追い詰められてる状況か・・・流石地元の走り屋、という所だな・・・)」

数回走って中々のライン取りを見せる祐馬も凄いが、岡海はほぼ完璧といったところだった。

間も無くコース全体の半分を走り終える頃・・・そのときである。

川「（ここいらで中間地点k・・・そこで来るか・・・!）」  
コーナーから立ち上がるうとする・・・その直後に、エボ6が幾度も鳴り続ける爆発音を響かせながら、シルビアの隣に迫ってきた。

岡「（ここいらで前を譲ってもらおうじゃねえかつ!）」  
しかし、岡海の思惑通りに行く事はなかった。

岡「なっ・・・!?!?」

川「（そうはさせねえっ!）」

アウトからほぼ同じ速度で並走してくるシルビア・・・こんな低速コーナーでまさかそんな事をやられるとは、思いもしなかっただろ  
う。

岡「（ここでいけると思ったのに、そんなのぜってえ無理だと言わ  
んばかりにサイドバイサイドを作り出すだなんて、この峠じゃあり  
えねえ・・・!）」

あまりの驚きを隠せず、次のコーナーのブレーキング勝負で負け、  
再びシルビアに前を行かれるエボ6。

川「（道幅だったっ広いだけの首都高だと思っなよ・・・アザーカー  
の間を縫って走ってりゃあ、多少なりともこういう技術は身につく  
ものなんだぜ!）」

岡「（舐めてるつもりはねえ・・・だが、俺に足りないものがある  
という事が・・・マシン性能差だけではないな・・・くそっ・・・!）」

「  
僅差の中、若干気持ちが悪くはなっていく岡海。  
祐馬は遠慮なく、引き離しにかかる。

川「（思ったよりいけるか・・・このままの攻めなら、一気にケ  
リをつけられる!）」

岡「（まだ終わるには早いぜ・・・ゴールまでまだ多少時間はある  
はずだ・・・その間に・・・）」

粘る岡海。再び勢いをつけるかのように、マフラーから爆発音が何  
発か響く。

再び連続コーナー・・・舵角を最低限に、いいラインを通過してい

く。

川「（ほぼ同じライン・・・食いつくか・・・!?）」

岡「（ついていけている・・・!このまま差が縮まればチャンスは作れるはずだっ!）」

岡海が一気にスパートをかけにいく。

ダウンヒルラスト、コーナーは大分少なくなってきたが、それでもまだ多少きつい部分だ。

それでも2台は、ありったけの加速で攻めていく。

ランエボ6は・・・シルビアに迫った。

川「（ここで差が縮まるか・・・!??ゴールまでは持ち堪えられるはずだ、気い抜くなよ、俺・・・!）」

アクセルを思い切り踏み込んで行く。一戦も勝利を逃すような事をしたくはない。

ゴールまでは後3コーナー・・・その時だった。

川「(っ!)」

低速左、ヘアピンほどではないが急なコーナー。

エボ6が一気にブレーキングを遅らせてきた。

岡「（勝負をかけるならここいらで行くしかねえ!最終コーナーまで待つてられつかあああっ!!!）」

だが、祐馬は動じなかった。

インを開け、アウトに寄る。

ブレーキングを限界まで遅らせたエボ6は、その勢いでシルビアに並ぶ事無く、コーナー進入でそのまま前に出た。

その瞬間、祐馬は思った。

川「（こりゃ完全に吹っ切れたか・・・）」

キイイイッ!!!

岡「っ!?!」

90km/h程まで減速を終えた所でエボ6のブレーキが一気に唸



る。

ただ唸ってるのではない。逝かれたのだ。

ギャラリー1「エボ6のブレーキが終わった!？」

ギャラリー2「マジかよ!？まだあれじゃ十分な減速出来てねえぜ!？」

ギャラリーは一斉に茂みへと避難する。

岡「くっ!!ぐあぁっ・・・」

サイドを引いてドリフトに持ち込ませようとするが・・・失敗。  
酷いアンダーステアと化していく。

川「(くっ・・・)」

祐馬はサイドを引いて減速、シルビアは道路を斜めに塞ぐ形で止まった。

エボ6はスピン・・・壁にぶつかるころではあったが、間髪なかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3943o/>

---

街道 ~ Pass go foward.

2011年10月8日03時13分発行